

梶山女学園大学・大学院 FD活動報告書
(2023年度)

梶山女学園大学・大学院 ファカルティ・ディベロップメント

第11号 (通巻 第24号)

2023年度

梶山女学園大学・大学院FD活動報告書

梶山女学園大学・大学院 ファカルティ・ディベロップメント

第11号（通巻第24号）

椋山女学園大学・大学院 FD 活動報告書 (2023年度)

目 次

1	はじめに	全学FD委員会委員長・大学院FD委員会委員長 長澤 唯史	
2	全学FD活動報告		
2-1	全学FD委員会記録		2
2-2	授業アンケート		4
2-3	各種研修		13
3	学部FD活動報告		
3-1	生活科学部		15
3-2	国際コミュニケーション学部		17
3-3	人間関係学部		19
3-4	文化情報学部		22
3-5	現代マネジメント学部		23
3-6	教育学部		24
3-7	看護学部		27
4	大学院FD活動報告		
4-1	大学院FD委員会記録		30
4-2	大学院授業アンケート		31
5	研究科FD活動報告		
5-1	生活科学研究科		33
5-2	人間関係学研究科		36
5-3	現代マネジメント研究科		40
5-4	教育学研究科		41
6	FD委員会名簿		

1 はじめに

はじめに

2023年度 相山女学園大学全学FD委員会委員長
同 相山女学園大学大学院FD委員会委員長
長 澤 唯 史

相山女学園大学および相山女学園大学大学院で2023年度に行われたFD活動についての報告書がまとまりましたので、ここにお届けいたします。私の学長補佐の任期も本年度をもって満了となり、FD委員会委員長もお役御免となります。学部・研究科の委員の先生方、教務課・企画課の職員のみなさまには、この4年間たいへんお世話になりました。この文章を執筆している時点（3月末）ではまだ学部・大学院のFD活動報告書が出そろってはおりませんが、一足先にご挨拶をさせていただきます。

さて、昨年の報告書の前文でも書きましたが、LMSの導入やアクティブラーニングへの取り組み、事前・事後学習のあり方の見直しなど、コロナ禍を契機に導入された教育システムやプログラムなどが本学のFD活動に新たな展開をもたらす一方で、大学設置基準の改正と同時に掲げられた「学習者本位の教育の実現」という理念に基づき、本学の教学システム全般において、従来の教育のあり方の根本的な見直しが喫緊の課題となっております。2024年度から本格導入される学修成果可視化のシステムを核として、単位の修得状況やGPAなどの教務的なデータに加え、授業アンケートや授業時間アンケートGPS-Academicなどを統合し一元化する仕組みを今後整備していくことになります。そこでは今後の本学におけるFD活動がさらに重要度を増すことは言うまでもありません。

また、本学が現在、学生募集において大きな課題を抱えていることはみなさんよくご理解のことと思います。急激な少子化の進展に加え、関東・関西の大規模私大との競争の激化などもあり、2023年度には中部地方の私立大学の6割以上が定員割れであったことが中日新聞（2024/3/30付）で報じられました。中部地方の数字が全国平均よりも8ポイントも高いことに加え、昨今顕著になってきている女子大離れの傾向もさらに強くなってきています。各種調査や本学独自のデータ分析では、近年の高校生の進学先の選択において大学案内やホームページなどでの情報収集が重要な役割を果たしていることも明らかになってきています。つまり客観的なデータに裏付けされた教育の質の保証がこれまで以上に必要な時代になっているのです。その意味で教員の資質向上や授業改善というFD活動は、大学設置基準や大学評価への対応を超えて、大学の魅力発信と学生募集という大学の生き残り戦略にとっても重要です。ぜひ学部・研究科レベルでも構成員レベルでもFDの必要性・重要性への認識を深め、日々の教育活動やカリキュラムの見直しなどへとつなげていっていただきたいと、最後にお願いをさせていただきます。

2 全学FD活動報告

- 2－1 全学FD委員会記録
- 2－2 授業アンケート
- 2－3 各種研修

(第 1 回) 2023 (令和 5) 年 4 月 25 日 (火) 17 : 00 ~ 17 : 50	1 報告 なし 2 議題 (1) 2023 年度 F D 活動に関する件 ① 2023 年度 F D 活動計画に関する件 ② 2023 年度前期授業アンケートに関する件 ③ 2023 年度新任教員研修に関する件 ④ 2023 年度 F D 研修会に関する件 (2) 2023 年度前期学生 F D スタッフ申請に関する件 (3) 椋山女学園大学全学 F D 委員会規準の一部改正に関する件 (4) その他
(第 2 回) 2023 (令和 5) 年 5 月 23 日 (火) 17 : 00 ~ 17 : 45	1 報告 (1) 椋山女学園大学改革アクションプラン 2023 について (2) 2023 年度学部 F D 活動計画について (依頼) (3) 2023 年度前期授業アンケートの実施科目確認について (4) その他 ① F D 研修会の実施日程について 2 議題 (1) 2023 年度後期学生 F D スタッフ募集要項に関する件 (2) その他
(第 3 回) 2023 (令和 5) 年 6 月 27 日 (火) ~ 7 月 3 日 (月) メール会議	1 報告 なし 2 議題 (1) 2023 年度 F D 研修会に関する件 (2) 2023 年度前期授業アンケートリフレクションに関する件 (3) その他
(第 4 回) 2023 (令和 5) 年 7 月 25 日 (火) 17 : 00 ~ 17 : 35	1 報告 (1) 2023 年度学部 F D 活動計画について (2) その他 2 議題 (1) 2023 年度後期学生 F D スタッフ申請に関する件 (2) 2023 年度 F D 事業推進予算に関する件 (3) 2023 年度後期授業アンケート実施要領等に関する件 (4) その他

(第 5 回) 2023 (令和 5) 年 9 月 26 日 (火) 17 : 00 ~ 18 : 05	1 報告 (1) 2023 年度 F D 研修会実施状況について (2) 2023 年度前期授業アンケート実施状況について (3) 2023 年度後期授業アンケート実施科目 (1 / 4 期科目) の確認について (4) その他 ① 2023 年度後期授業アンケートに係るスケジュール確認について ② 人間関係学部 F D 活動について 2 議題 (1) 2024 年度シラバス項目に関する件 (2) 2024 年度 F D 事業推進予算に関する件 (3) その他
(第 6 回) 2023 (令和 5) 年 10 月 24 日 (火) メール会議	1 報告 (1) 2023 年度後期授業アンケート (実施科目確認) について (2) その他 2 議題 なし
(第 7 回) 2023 (令和 5) 年 11 月 28 日 (火) 17 : 00 ~ 17 : 55	1 報告 (1) 相山女学園大学改革アクションプラン 2023 検証について (2) 2023 年度 F D 活動の検証 (中間検証) と 2024 年度計画について (3) 2024 年度新任教員研修計画について (4) その他 ① 学部 F D 講演会等 (全学 F D 事業推進予算からの支出分) の学内周知について 2 議題 (1) 2023 年度後期授業アンケートリフレクションに関する件 (2) 2023 年度「今年度の振り返り」と「来年度の目標」に関する件 (3) 2023 年度 F D 活動報告書に関する件 (4) その他
(第 8 回) 2024 (令和 6) 年 1 月 23 日 (火) ~ 1 月 30 日 (火) メール会議	1 報告 (1) 2024 年度 F D 推進事業予算 (新規予算要求裁定結果) について (2) 2023 年度の各学部の F D 活動報告について (3) その他 ① 各種日程の確認について ② 2023 年度後期学生 F D スタッフ成果報告書について 2 議題 (1) 2023 年度 F D 活動の検証と 2024 年度の計画に関する件 (2) 2024 年度前期学生 F D スタッフ募集に関する件 (3) その他
(第 9 回) 2024 (令和 6) 年 3 月 22 日 (金) メール会議	1 報告 (1) 2023 年度後期授業アンケート結果について (2) 2023 年度「今年度の振り返り」と「来年度の目標」の入力結果について (3) 2023 年度後期学生 F D スタッフ成果報告書について (4) その他 2 議題 なし

【前期】

1. 実施概要

- ・実施期間：（1 / 4 期科目）2023年 5 月 29 日（月）～2023年 6 月 9 日（金）
（半期科目） 2023年 7 月 10 日（月）～2023年 8 月 3 日（木）
- ・実施対象科目：
 - ◎専任教員
2023年度前期開講の授業科目のうち、卒業研究、受講者数が10名未満の科目を除く全ての授業科目から、できるだけ受講者の多い科目を原則 2 科目選択
 - ◎非常勤教員
2023年度前期開講の授業科目のうち、集中講義など、実施期間までに授業が完了しない科目を除いた全科目
- ・実施方法：Webによる

2. 実施科目数及び実施率

学 部	対 象 科目数	実 施 科目数	実施率	未実施 科目数
教 養 教 育 科 目	184	143	77.7%	41
生 活 科 学 部	105	97	92.4%	8
国際コミュニケーション学部	144	102	70.8%	42
人 間 関 係 学 部	77	67	87.0%	10
文 化 情 報 学 部	91	65	71.4%	26
現代マネジメント学部	59	40	67.8%	19
教 育 学 部	109	101	91.2%	8
看 護 学 部	42	35	83.3%	7
教 職 共 通	12	12	100.0%	0
計	823	662	80.4%	161

※「未実施科目数」＝回答率が 0.0 % の科目

※参考：2022年度前期授業アンケート実施率（Webで実施） 82.7 %（712/861科目）

※授業がアンケート実施前に終了する科目、担当者が交代した科目等は対象科目から外した。

3. 総合的充実度（設問12）回答

「設問12 総合的にみてこの授業は充実していた。」

学 部	そのとおりである	どちらかといえば そのとおりである	どちらかといえば そうではない	そうではない
教 養 教 育 科 目	74.2%	20.2%	2.4%	0.8%
生 活 科 学 部	67.0%	24.2%	3.3%	2.5%
国際コミュニケーション学部	82.0%	13.8%	0.8%	0.5%
人 間 関 係 学 部	78.5%	17.4%	1.6%	0.2%
文 化 情 報 学 部	62.5%	26.6%	4.7%	1.5%
現代マネジメント学部	66.4%	27.1%	1.7%	3.3%
教 育 学 部	77.2%	16.9%	1.2%	0.4%
看 護 学 部	72.0%	23.7%	2.0%	0.4%
教 職 共 通	88.4%	6.1%	2.8%	1.6%
大 学 全 体	74.2%	19.6%	2.3%	1.2%

4. リフレクションの提出状況

学部別提出率

学 部	アンケート 実施科目数	リフレクション 提出科目数	リフレクション 提出率
教 養 教 育 科 目	143	106	74.1%
生 活 科 学 部	97	77	79.4%
国際コミュニケーション学部	102	68	66.7%
人 間 関 係 学 部	67	47	70.1%
文 化 情 報 学 部	65	53	81.5%
現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	40	35	87.5%
教 育 学 部	101	66	65.3%
看 護 学 部	35	19	54.3%
教 職 共 通	12	4	33.3%
全学部 (昨年度前期実績)	662 (712)	475 (469)	71.8% (65.9%)

※10月末に集計結果及びリフレクションの学内開示（S*mapのキャビネット）

【後期】

1. 実施概要

- ・実施期間：（1 / 4 期科目）2023年11月9日（木）～2023年11月20日（月）
（半期科目）2023年12月21日（木）～2024年1月26日（金）
- ・実施対象科目：
 - ◎専任教員
2023年度後期開講の授業科目のうち、卒業研究、受講者数が10名未満の科目を除く全ての授業科目から、できるだけ受講者の多い科目を原則2科目選択
 - ◎非常勤教員
2023年度後期開講の授業科目のうち、集中講義など、実施期間までに授業が完了しない科目を除いた全科目
- ・実施方法：Webによる

2. 実施科目数及び実施率

学 部	対 象 科目数	実 施 科目数	実施率	未実施 科目数
教 養 教 育 科 目	166	129	77.7%	37
生 活 科 学 部	115	98	85.2%	17
国際コミュニケーション学部	124	85	68.5%	39
人 間 関 係 学 部	92	67	72.8%	25
文 化 情 報 学 部	94	75	79.8%	19
現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	64	38	59.4%	26
教 育 学 部	101	69	68.3%	32
看 護 学 部	30	22	73.3%	8
教 職 共 通	11	7	63.6%	4
計	797	590	74.0%	207

※「未実施科目数」＝回答率が0.0%の科目

※参考：2022年度後期授業アンケート実施率（Webで実施）79.2%（639/808科目）

※授業がアンケート実施前に終了する科目、担当者が交代した科目等は、対象科目から外した。

3. 総合的充実度（設問12）回答

「設問12 総合的にみてこの授業は充実していた。」

学 部	そのとおりである	どちらかといえば そのとおりである	どちらかといえば そうではない	そうではない
教 養 教 育 科 目	72.9%	21.0%	2.3%	1.3%
生 活 科 学 部	73.7%	20.7%	2.9%	0.8%
国際コミュニケーション学部	84.9%	10.8%	0.8%	0.4%
人 間 関 係 学 部	79.6%	15.2%	2.2%	1.2%
文 化 情 報 学 部	66.9%	25.9%	2.8%	0.0%
現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	71.0%	20.6%	3.3%	2.3%
教 育 学 部	81.9%	14.2%	1.0%	0.6%
看 護 学 部	72.3%	17.9%	2.5%	5.8%
教 職 共 通 開 講	78.3%	17.0%	0.0%	2.9%
大 学 全 体	75.7%	18.1%	2.0%	1.7%

4. リフレクションの提出状況

学部別提出率

学 部	アンケート 実施科目数	リフレクション 提出科目数	リフレクション 提出率
教 養 教 育 科 目	129	86	66.7%
生 活 科 学 部	98	84	85.7%
国際コミュニケーション学部	85	54	63.5%
人 間 関 係 学 部	67	46	68.7%
文 化 情 報 学 部	75	64	85.3%
現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	38	32	84.2%
教 育 学 部	69	55	79.7%
看 護 学 部	22	14	63.6%
教 職 共 通 開 講	7	5	71.4%
全学部 (昨年度後期実績)	590 (639)	440 (451)	74.6% (70.6%)

※ 3 月末に集計結果及びリフレクションの学内開示（S*mapのキャビネット）

2023年度（前期）授業アンケート結果

1. 実施の目的

学生による授業アンケートは、授業が学生にどのように受け止められているのかの全体的傾向を理解し、教員に対して授業の質的向上のヒントを提供することを目的とする。また、学部・学科及び大学全体としてのカリキュラムレベルでのFDを推進するための資料として活用する。

2. 実施時期

実施期間：(1/4期科目) 2023年5月29日(月)～6月9日(金)
(半期科目) 2023年7月10日(月)～8月3日(木)

3. 実施方法

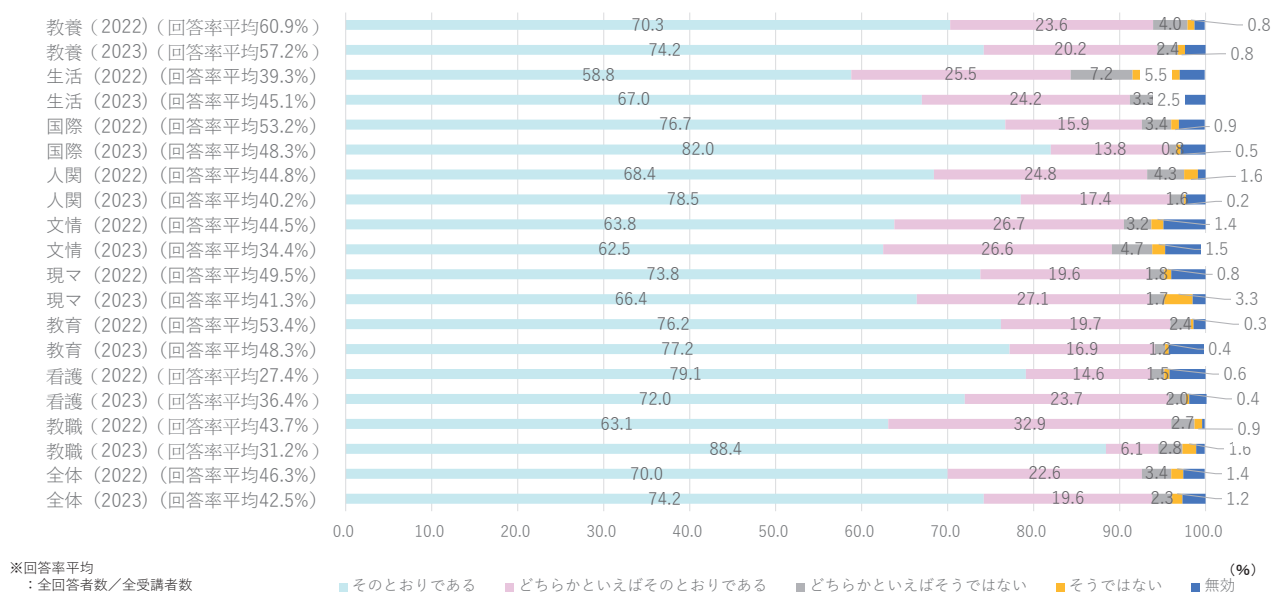
Webによる

4. 実施科目数

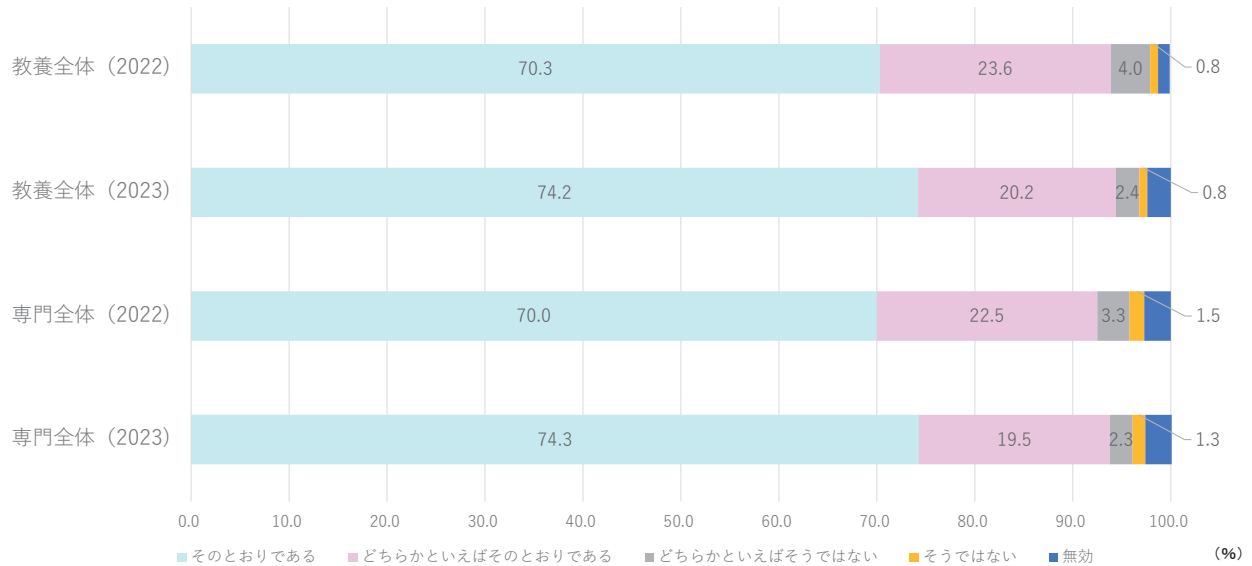
学部等	2023年度前期	(参考)2022年度前期
教養教育科目	143	159
生活科学部	97	84
国際コミュニケーション学部	102	125
人間関係学部	67	67
文化情報学部	65	72
現代マネジメント学部	40	36
教育学部	101	107
看護学部	35	48
教職共通開講	12	14
大学全体	662	712

集計・分析結果

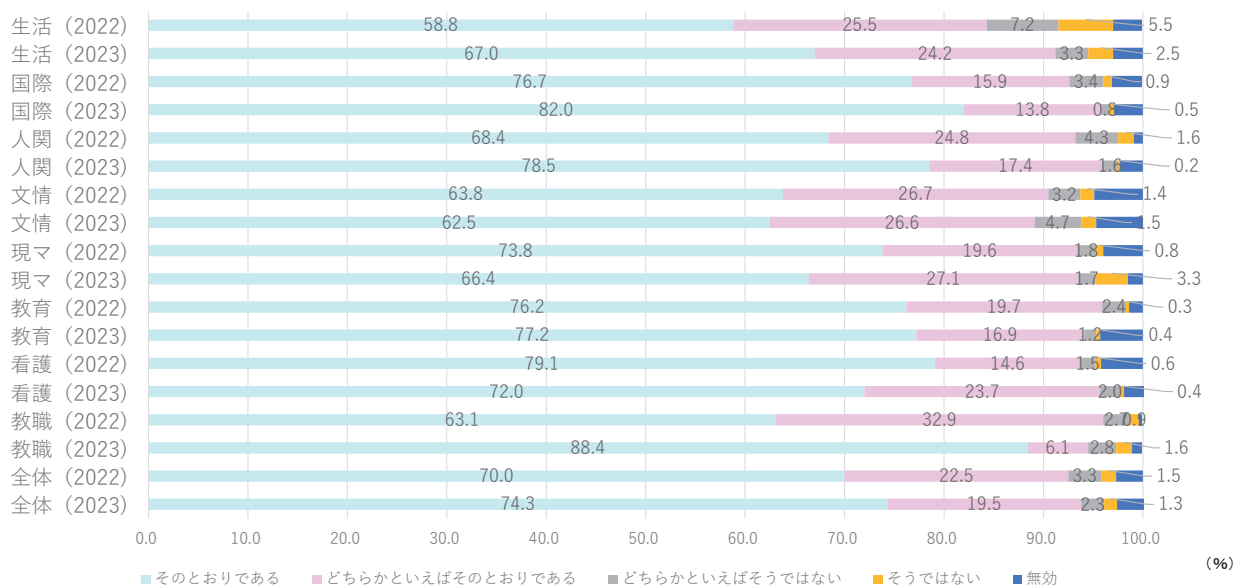
総合充実度（全体）



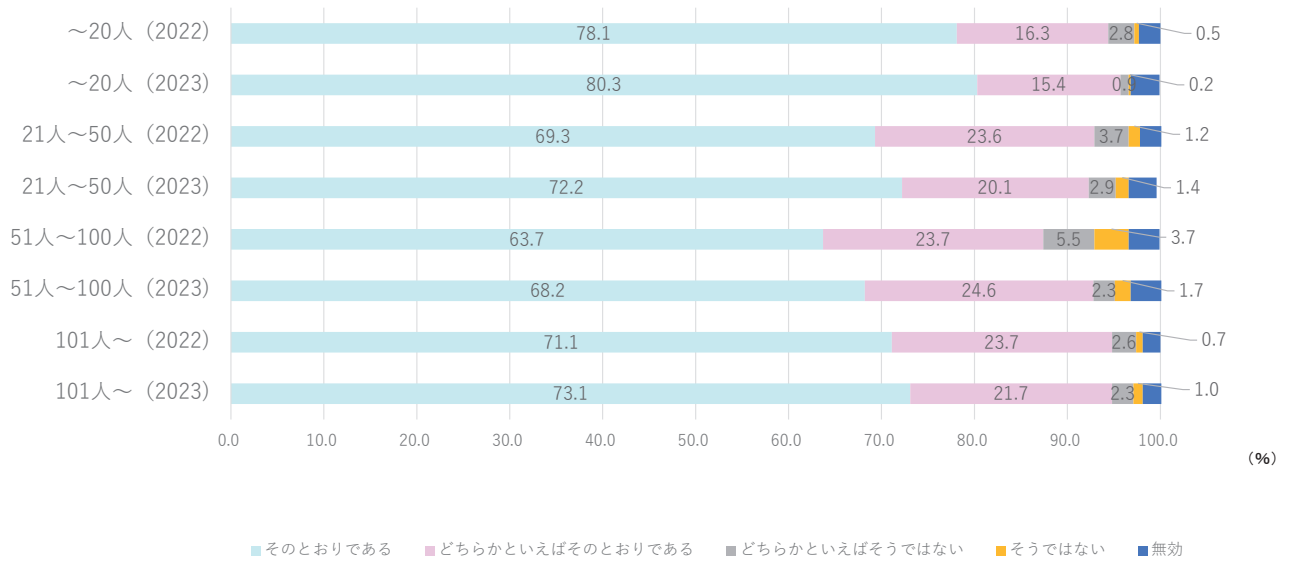
総合充実度（教養・専門別）



総合充実度（専門）



総合充実度（受講者数別）



2023年度（後期）授業アンケート結果

1. 実施の目的

学生による授業アンケートは、授業が学生にどのように受け止められているのかの全体的傾向を理解し、教員に対して授業の質的向上のヒントを提供することを目的とする。また、学部・学科及び大学全体としてのカリキュラムレベルでのFDを推進するための資料として活用する。

2. 実施時期

実施期間：(1/4期科目)2023年11月9日(木)～2023年11月20日(月)
(半期科目)2023年12月21日(木)～2024年1月26日(金)

3. 実施方法

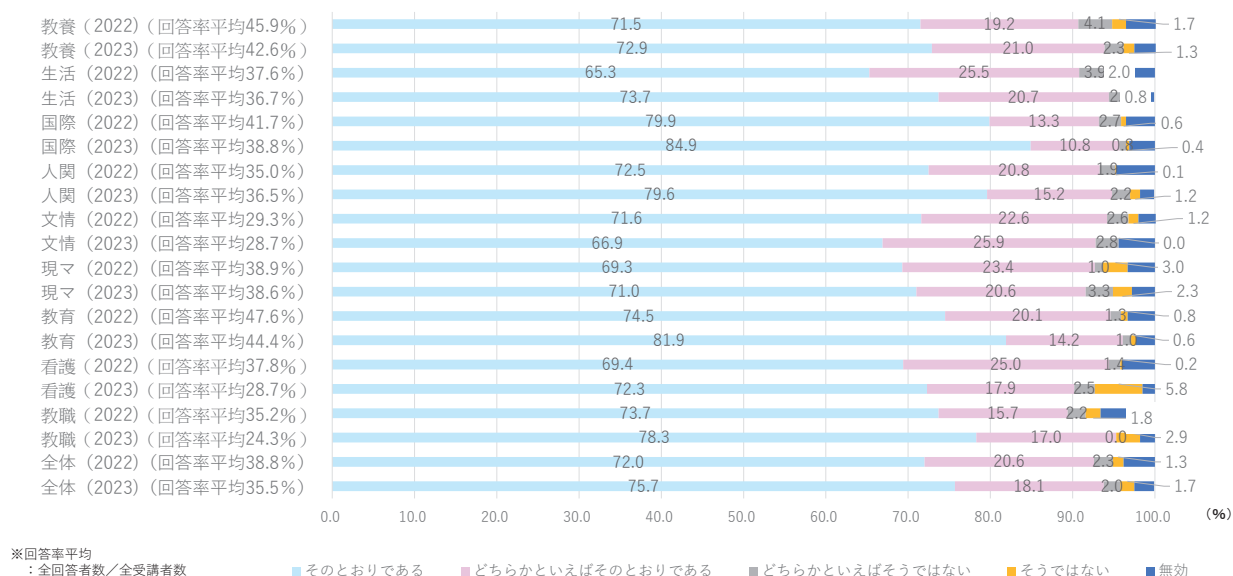
Webによる

4. 実施科目数

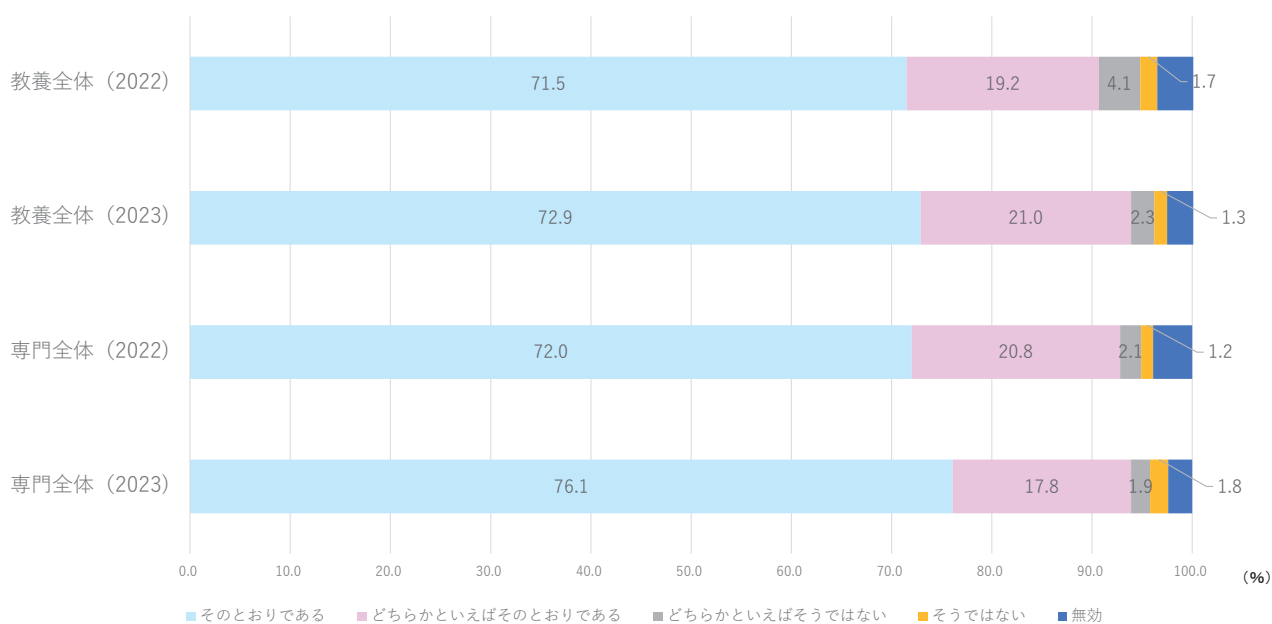
学部等	2023年度後期	(参考)2022年度後期
教養教育科目	129	136
生活科学部	98	96
国際コミュニケーション学部	85	112
人間関係学部	67	63
文化情報学部	75	71
現代マネジメント学部	38	47
教育学部	69	82
看護学部	22	24
教職共通開講	7	8
大学全体	590	639

集計・分析結果

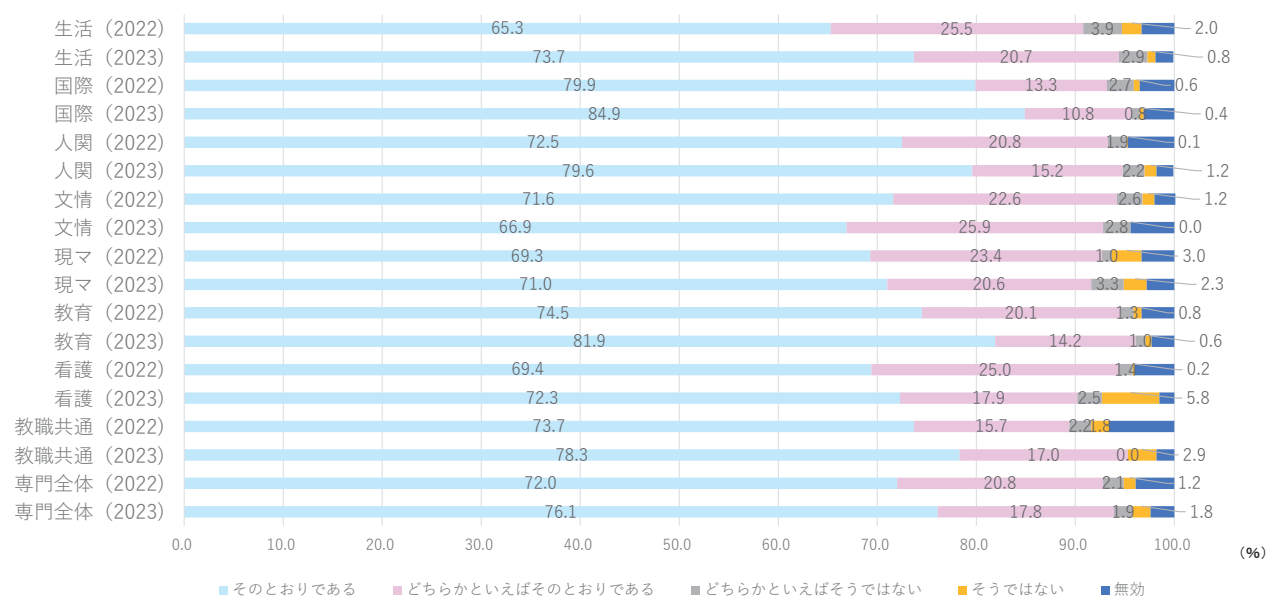
総合充実度（全体）



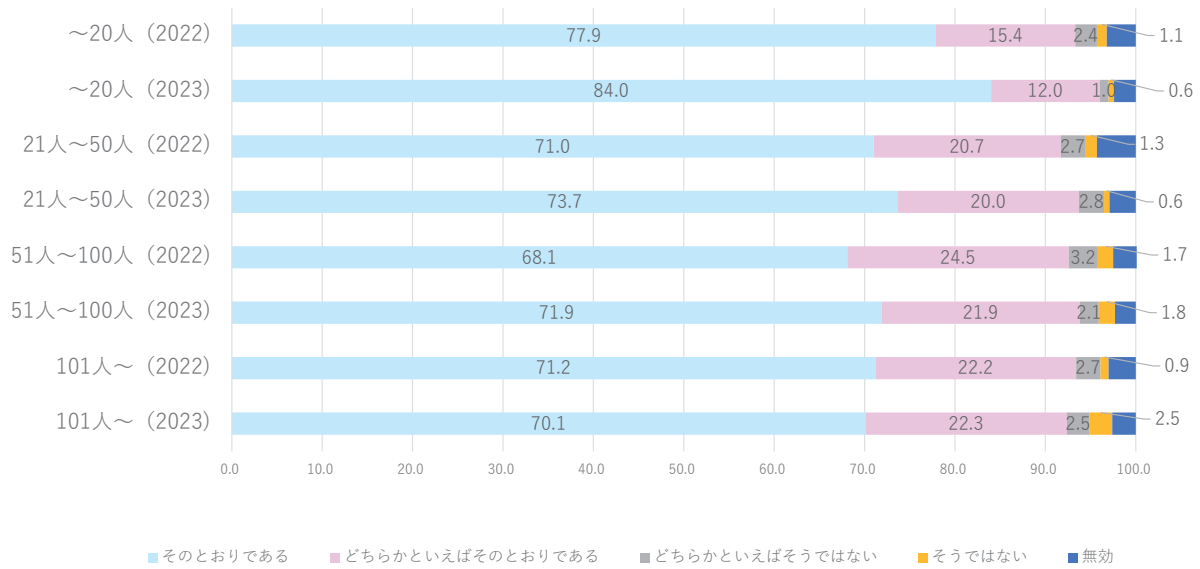
総合充実度（教養・専門別）



総合充実度（専門）



総合充実度（受講者数別）



1. FD研修会①

- ・日時：2023年9月5日（火） 10:00～11:00
- ・場所：Zoomでのオンライン開催
- ・テーマ：学修成果の可視化に向けたGPS-Academic（コンピテンシーテスト）の活用方法について
～前期の結果分析～
- ・講師：株式会社ベネッセキャリア
大社接続事業本部 大社接続営業部西日本カスタマーサクセス課 課長 上村明子氏
- ・参加者数（オンデマンド視聴を含む。）：

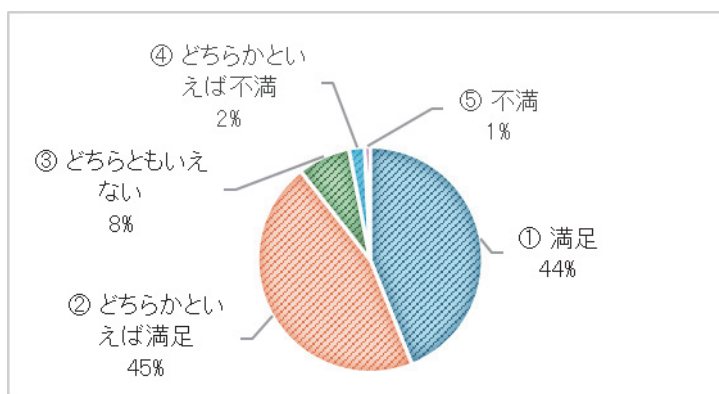
生	国	人	情	現	教	看	合計
27名 (96.4%)	24名 (92.3%)	31名 (100%)	20名 (80.0%)	19名 (90.5%)	27名 (100%)	24名 (82.8%)	172名 (92.0%)

※その他：生活助手10、看護助手12、事務当日参加（医務室含む。）41、事務オンデマンド2、合計237名

《アンケート集計結果（当日参加者）》

Q. 今回の研修会について全体としての満足度をお答えください。 (名)

①満足	②どちらかといえば満足	③どちらともいえない	④どちらかといえば不満	⑤不満
58	60	10	3	1



2. FD研修会②

- ・日時：2024年1月9日（火）12:30～13:10
- ・場所：Zoomウェビナーでのオンライン開催
- ・テーマ：学修成果の可視化に向けたポートフォリオシステムの教員向け説明会
- ・講師：株式会社SIGEL 代表取締役 鈴鹿健治氏
- ・参加者数：156名（教員138名、事務職員18名）

3. 新任教員研修（学外）

- ・日時：2023年9月13日（水）13:30～15:30
- ・場所：Zoomでのオンライン開催
- ・内容：公益財団法人大学コンソーシアム京都主催「FD合同研修プログラム・テーマ別研修」
第1回「IR奮闘記 - IR的思考を授業に活かすには? -」
- ・参加者：人間関係学部講師1名、現代マネジメント学部講師1名

3 学部FD活動報告

- 3－1 生活科学部
- 3－2 国際コミュニケーション学部
- 3－3 人間関係学部
- 3－4 文化情報学部
- 3－5 現代マネジメント学部
- 3－6 教育学部
- 3－7 看護学部

生活科学部FD委員会委員

(管理栄養学科) 加藤昌彦、三田有紀子

(生活環境デザイン学科) 橋本雅好、川野紀江

(学部長・オブザーバー) 本山 昇

【1】活動計画（本年度の活動内容および活動目標）

- ①全学で実施される前期および後期の授業アンケートの学生からの回答率を高め、全教員にリフレクションペーパーの記録を依頼する。授業アンケートの結果を基に、全教員がリフレクションペーパーの記載を通し、授業内容の改善を図る。
- ②1年生のコンピテンシーテストの結果分析を学科ごとにベネッセから報告してもらい、注目すべき点などのレクチャーを受ける。コンピテンシーテストの結果を学部・学科内で共有し、個々の授業内容の改善やカリキュラムの改定に活用する。
- ③学部のベストティーチャー教員（3名）の講義を各教員が参観し、気づきに結び付ける。その結果、各教員が教育の質の向上を図り、教育効果が高く、学生の満足度が高い授業を行う。
- ④全学FD研修会への全教員の参加を促す。

【2】FD活動の実施報告

①委員会の開催

委員会は2023年4月～2024年3月の間、メール会議または対面にて適宜実施した。協議事項は、FD活動計画、活動目標の達成度および授業評価の見直しである。

＜協議事項＞

- ・昨年と同様に授業アンケートは、webで実施し、実施要領とリフレクションを確認。
- ・学部FD活動計画を確認。

②2023年度に企画・実施されたFD活動

- ・4月 第3期認証評価に向けての学生ヒアリングを将来構想検討委員が中心となり、学生14人を対象に対面形式で実施（管理栄養学科）
テーマは、「管理栄養士になりたいという気持ちやモチベーションは、入学当初と4年生になった今で、どのように変化したか？また、その様に気持ちが変化した理由は何か」
- ・5月 主に3年生を対象としたOG懇談会開催。社会人として活躍している本学卒業生と学生の交流を通して、教員の教育技法の改善につなげる。同時に、学生は就職を中心に、将来の方向性の決定に役立てることで教育環境の整備につながった（管理栄養学科）。
- ・6月 ベネッセによるコンピテンシーテスト集計結果に関する学科別説明会と7月末までに、結果を踏まえて1年生全員に対して、指導教員による面接指導を行った（管理栄養学科・生活環境デザイン学科）。
- ・7月 授業アンケート実施（全学）
- ・7月 教員の教育技法の改善につなげるため、国家試験に精通したプロフェッショナルによる国家試験受験のための心構え、および模擬授業を実施（管理栄養学科）。
- ・9月 FD研修会（全学）
- ・12月 3年生に対するコンピテンシーテストに関する学生評価へのベネッセからの説明、および、その結果を踏まえて3年生全員に対する指導教員の面接指導（管理栄養学科・生活環境デザイン学科）。

- ・12月～2024年1月 授業アンケート実施（全学）
- ・2024年1月～2024年3月 「今年度の振り返り」と「来年度の目標アンケート」の実施（全学）
- ・2024年3月 卒業式当日に、資格取得や授業内容についてのアンケートを行い、その結果の次年度の学科運営に活用する資料として学科内で共有した（生活環境デザイン学科）。

【3】活動計画の検証（評価点および課題点）

活動計画①については、学生に実施した授業アンケートの実施率が前期77.8%（昨年85.1%）、全学80.4%、後期85.2%（昨年82.6%）、全学74.0%であり、前期はむしろ減少していたが、後期は、アナウンス効果もあり若干増加したものの、昨年度の実施率と比べて大幅な増加にはつながっていない。具体的な「授業アンケート」の内容では、専門教育における総合充実度は、「どちらかといえばそうである」以上の肯定意見が、学部全体として前期91.2%（昨年84.3%）、後期94.4%（昨年90.8%）で昨年と比べて改善している。しかし、回答率が低い授業も見られ、今後も教員の個人あるいはグループレベルでの更なる改良を試みることを求められる。回答率に関しては、学生に対して強力にアンケート実施の呼びかけを行っているが、Webでの実施であることから入力を忘れてたり、送信ミス等のためにカウントされなかったりすることも考えられるため、Webでのアンケートではなく、授業時間内に10分程度、対面で回答紙を用いて行うなど、全学的にも回答率を高める工夫を検討する必要がある。

また、教員のリフレクションペーパーの提出率は前期70.6%（昨年57.7%）、後期85.7%（昨年73.2%）で昨年より高い値となった。次年度は、今年度の結果を踏まえ、リフレクションペーパーの提出率100%を目指したい。

活動計画②については、コンピテンシーテストの結果を基に、ベネッセからの情報提供を参考に、新入生および3年生に対して、両学科ともに個人面談を行った。

面談の結果を基に、学生の状況が把握できれば、今後、学部・学科内で学生の状況を共有し、個々の授業内容の改善やカリキュラムの改定に活用できると考えるが、今年度は、教員側が、そのレベルにまで達していない。

活動計画③については、教員の参観授業への出席率が57%（28名中16名が参観授業に出席）と低かった。今回は、出席後の検討会等を科すことなく参加を促したにもかかわらず、参加率が低かったことから、参観授業の意義を見出すには至らず、今後、参観授業の実施そのものを含めた学部FD活動の在り方、方法論について、抜本的に見直す必要がある。

活動計画④については、積極的にFD研修などへの参加の呼びかけを行った。9月に実施したFD研修会の出席率は96.4%（28名中27名参加）で全学90.9%平均以上の出席率であった。参加の呼びかけを行ってきた成果といえるものの、今後も継続して参加の呼びかけ、次年度こそは全員参加を目指す。

【4】次年度へ向けた計画

FD活動を積極的に推進し、意義あるものにするために、今年度の活動計画の実施における反省から、

- ①授業アンケートに対する教員のリフレクションペーパーの全員提出をめざし、これまで以上に声掛けが必要であろう。
- ②今年度から初めて導入したコンピテンシーテストを活用した学生との個人面談を、今後、どのように活用していくのかを学部・学科において将来構想委員等を交えて十分議論する必要がある。
- ③参観授業に対しては、参加率が極めて低かったことから、継続させるかどうかも含め抜本的な見直しが必要である。
- ④全学でのFD研修会には、今年度の参加率も昨年同様に高かったが、100%には至っておらず、このような参加型のFD活動に対して積極的な学部教員の参加を促していくことが重要である。

結論として、①FD活動の活性化を促すために、教員からの提案を促し、また、有用と考えられるものを取り入れること、そのためのアナウンス方法を工夫すること、③現在、実施されているFD活動への積極的な参加を促すように学部教員に積極的に訴えることが重要と考える。

【1】活動計画（目標）

- ・コンピテンシーテストを利用した学習成果について確認・情報共有を行う。
- ・国際コミュニケーション学部外部評価報告書をもとに外部評価の内容について説明を受け、今後に生かす。
- ・各々の4年間の学修達成度をディプロマポリシーに照らし合わせ自己評価してもらうことで、ディプロマポリシーの点検を行う。

【2】実施報告**1. 4年間の学修の成果を問うアンケート調査の実施**

調査時期：卒業式 2024年3月15日

調査内容：大学／学部での学びの到達度の指標「Can do list」をgoogle formで実施した。

「Can do list」は4年間期末ごとに資料の探し方、読み方、研究倫理、レポート・論文の書き方、発表の仕方の各項目を自己チェックできる指標として2019年から学部で導入した到達度チェックリストである。ファーストイヤーゼミで配布しているが、その後のチェックは自分で行っているため、卒業時の学生の到達度を確認することを目的として、卒業式を利用したアンケートを実施した。

調査結果：3月15日付で卒業した言語コミュニケーション学科124人中93人（回収率75%）、表現文化学科98人中58人回答（回収率59%）。

資料の探し方に関する項目で、図書館内の資料に関して、資料の種類と保管場所が分かると答えたのが52.6%に過ぎず、前年の79.3%と比較すると、非常に低下していた。とくにほとんどわからないと回答した人は25.2%と4分の1を上回っていた。この学年は、1～2年次がコロナ禍でほぼ遠隔授業となり、実際に図書館を利用する機会が激減していたことも関連した結果ではあるが、図書館利用を進める教育が十分でなかったことに関しては、反省点も多いだろう。図書館内の資料検索に関する回答では、31.8%の人が図書館内の利用検索方法を理解していなかった。電子書籍や雑誌論文に関しては37.1%と4割近くが分かっていなかった。それぞれ昨年20.7%、32.2%であったことを考えると、卒論を書いた後であるにもかかわらず、資料の検索の力は十分ではなく、また落ちているといえよう。他の図書館からの取り寄せ方法については57.9%が分からないと答えている。「適切な資料を探し出すことができるようになった」という項目に関しては、おとしは84.1%、昨年は75.0%で下がっていたのが今年はさらに下がり、63.6%であった。図書館利用には課題が残る。資料を読み解く力も下がっている。「資料（情報源）の種類を信頼性・信憑性という点から評価・序列化できるようになった」という項目では、昨年度81.4%達成していたものが69.5%に下がっている。「自分の主張の根拠を探し出す必要性を理解した」という項目では、82.1%が理解したと答えているが、そのなかで、「とても理解した」が48.6%から34.4%に減っていた。研究における不正行為に関しては95.3%の学生が理解していた。研究において問いや仮説を立てる意味は92.1%、反論・応答の意義は88.7%が理解していた。倫理、書き方、発表等に関しては9割以上の達成が見られた。論文の構成と形式についても90.7%が理解しており、文章の構造を把握したうえで書く力を身につけることができたようである。プレゼンの力については8割以上が理解したと答えている。自由記述では、ファーストゼミの授業に関して、「ゼミによってレポートの描き方をするゼミとしないゼミがあったので統一してほしい」という意見が出た。また「コロナで図書館などの使い方がよく分からなかった」という回答もあった。一方で、「授業がこんなに楽しいと思えたのは大学に入学してからでした」、「国コミの授業は4年間日々の楽しみでした」、「英語学習に特化できる点が良かった」、「とてもためになる授業ばかりで、自分のためになりました」など、大学での学びを楽しみながら身につけて

いくことができたというコメントが見られた。4年間での学びに課題の残る学生も見られたものの、おおむね達成して卒業を迎えることができたといえよう。

2. コンピテンシーテストを利用した学修成果についての確認・情報共有

実施時期：2023年6月～2023年12月

目的：学修成果の確認として、本年度から1年生だけではなく3年生にもコンピテンシーテストを実施した。テスト解析に基づく結果を学生が確認するだけでなく、自己分析できるように、教員と面談を実施した。学生の状況を把握するとともに、学生の状況に合わせた指導ができるようにすることが目的である。

結果：テストの結果は芳しくない学生も多かったものの、教員が個別に話を聞くことで、学生が自分の長所を理解し、それぞれの学びに対する方向づけをすることに効果があったようである。今回は、授業外でテストを実施したため、解答に集中できなかったと答える学生も見られた。概して受験に消極的な学生は、授業への参加意欲も低いようである。3年生は1年時の結果と比較することで、自分を見つめ直し、就職活動にも利用すると答えていた。ただし、GPAの低い学生が必ずしも思考力が低いわけではなく、コンピテンシーテストとGPAの相関の分析は容易ではないという課題も生じた。思考力の数値が低い学生が多かったが、どのようにこれを伸ばせるのか、教育方法について検討する必要がある。一方で、テストの結果だけでなく、面談をすることで、学生が自己分析をすると同時に、教員が学生を把握できる機会となっていた。こうした状況を学部長が把握し、全体の状況を共有することができた。この結果は「2023年度1年生コンピテンシーテストを終えて」と「2023年度3年生コンピテンシーテスト総括」としてまとめている。

3. 外部評価の結果の共有

時期：2023年12月12日

目的：国際コミュニケーション学部外部評価報告書をもとに外部評価の結果が共有された。学部長、学科主任から説明を受け、教授会構成員が内容を共有することで、今後のあり方について検討する。

内容：外部評価の総評のなかで、教員の間での危機感が共有されているのかという指摘がなされたことに対して、改革に向けて意思統一をしていく必要性が検討された。また外国語学部への改組を見据えたうえで、多言語を学ぶ難しさが指摘され、議論となった。多様な海外の文化社会の理解の重要性を理解し、語学能力を身につけることのできる学生を育てていくために必要な課題について検討された。外部評価については、学長に提出した「外部評価委員報告書」（2023年10月20日付け）、および「外部評価報告書の課題に対する改善について」（2024年2月10日付け）に詳細を記している。

【3】2023年度の振り返り

2023年度は外部評価報告書に基づく指摘を受け、それに基づく議論がされたことは、国際コミュニケーション学部として非常に有効であった。本年度から強化されたコンピテンシーの活用については、模索段階ではあるものの、教員が情報を共有し、課題を議論することができた。卒業時アンケートを前年度と比較すると、学生の資料収集の能力の低下が見られたが、それでも研究に関する態度や進め方についてはおおむね達成して卒業していた。学生の状況を把握しながら教育体制についても今後引き続き検討していくことが必要であろう。

【4】次年度に向けた計画

今年度に引き続き、学生の学習達成度の確認からディプロマポリシーを検証していく。また2023年度より強化された、コンピテンシーテストを利用した学習成果を活用する方向を継続して続けていく。教員・学生双方に、実施後の意見を聴取することで有効な活用を予定している。

新学部体制が動き出す中で、国際コミュニケーション学部の学生達に対しても十分な教育を進め、授業のあり方、教員と学生との関係性についても検討する。

【1】活動報告

2023年度、人間関係学部では以下のテーマ、資料に基づき、FD活動を行った。実施形態は、各学科とも3回にわたって意見交換を行った。

テーマ：3つの意識調査データをもとに、学科ごとに、学びに対する学生の意識（満足、不満足）や主体的な学修時間のあり方などの課題を洗い出し、教育活動の見直しを行う。

使用した資料

1. 学生の学修時間等に関するアンケート調査（2022年度）
2. 大学生活に関する入学時意識調査（2022年度）
3. 卒業時学生総合満足度調査（2022年度）

1. 心理学科FD意見交換会

第1回は本会の趣旨について説明、第2回はテーマについて自由に意見・感想等を出し合う、第3回はそれを踏まえてさらに深く意見を交換するという趣旨で開催した。なお第3回は、短時間であったため、メール会議も併用し、期間延長して追加意見を募った。

開催日

第1回 9月5日（火） 学科会議後（資料の頭出し） 参加者：12名

第2回 10月3日（火） 学科会議後（意見交換） 参加者：14名

第3回 11月7日（火） 学科会議後（追加の意見募集） 参加者：10名

※第3回は、11月10日（金）まで延長して追加意見受付。

第1回の意見

フィードバックについて

- ・各種アンケートは学生の回答後に全体フィードバックは行っているか？
- ・各資料（学修時間調査および入学時意識調査、特に入学時意識調査）をみると回答時点で困っていることがある学生もおられるようだが、何かその時点で個別のフィードバックは行っているか？回答自体は無記名と思われるが、学籍番号等の記載欄はあるか？もしくはgoogle formではローデータ（メールアドレス）がわかる場合もある。個別対応は、無記名とはいえ可能か？

第2回の意見 ※冒頭より、FD委員より各アンケートの追加情報について説明。

学修時間に関するアンケート調査について

- ・学生の勉強時間、クラブサークルの時間が短い。
- ・アルバイトは1週間で10時間以上の程度、そこまで時間は長くないかもしれない。
※経済的側面が大変な学生もいるとは思われるが、就学制度の利用も関連しているかもしれない。
- ・人間関係学部の場合、授業後に日進からスクールバスで星が丘キャンパスに帰る学生が極めて多い。そうすると相対的に日常で使える時間が少なくなる。これに対しては事前学習および事後学習を移動中で学ぶ（スマホで学ぶ）など、日進キャンパスへの通学を踏まえた無理のない学習時間の確保、指導が必要かも

しれない。

- ・趣味の時間に多く当てている可能性もあるため、併せて測定するとよいかもしれない。

卒業時学生総合満足度調査について

- ・満足度（p 2 , p 3 , p 6 .）については2021年で落ちこみ、2022年で追いついたとも読めるが、コロナの影響が関連しているかもしれない。
- ・フィードバックやフォローアップがないにも関わらず、氏名の記入を求める調査をする理由とは？入試区分、GPA ごとの分類・分析を行うため？倫理的な観点からも今後、検討が必要ではないか？
- ・調査方法の信頼性について、検討する必要がある。特に日進キャンパスでは、卒業式の限定された着座時間での回答である。時間の制限（スクールバスや着付けの返却時間など）がある中での調査になると、信頼性を確保できない、卒業式というイベントでのバイアスも回答の高得点（満足している）につながっている可能性もあり、解釈が難しくなる。
- ・調査項目数が多いことも、検討する必要がある。日進キャンパスでの移動の問題を考慮するか、事実ベース（学習時間、就職先を選択した理由など）の問いに限定するか、など工夫が必要である。日進キャンパスで行うのであれば卒業後は回答率が下がることが懸念されるため、授業最後や卒論発表会での時などタイミングを調整する必要がある。この場合、全学的調査と異なる時期にしてもよいかという問題も併せて検討する必要がある。

第 3 回の意見

- ・学修時間等に関するアンケートの文面について修正をしたほうがよいのではないかな？
具体的には以下。
（現行）予習・復習など授業時間外における学習時間等の調査を毎年行い、
（修正案）授業時間外における学習時間等（予習・復習などを含む）の調査を毎年行い、
理由：現行の文面だと、「予習・復習など授業時間」外、とも読める。そうすると、予習・復習は授業時間のため、予習・復習を除いた勉強時間はゼロ？という質問もあった。「予習・復習」は、学習時間にかかっていると認識した文章だと思われるが、二重の意味に受け取られるのは望ましくないと思われる。
- ・卒業時学生総合満足度調査について、全学として卒業式に行うことを決めているわけではなく、別日で行っている学部もある。それを考慮すると人間関係学部の場合は、卒論発表会時が適切ではないかな？

2. 人間関係学科FD意見交換会

開催日

- | | | | |
|-------|-------------|----------------|----------|
| 第 1 回 | 9 月 5 日（火） | 学科会議後（資料の頭出し） | 参加者：14 名 |
| 第 2 回 | 10 月 3 日（火） | 学科会議後（意見交換） | 参加者：16 名 |
| 第 3 回 | 11 月 7 日（火） | 学科会議後（追加の意見募集） | 参加者：16 名 |

【意見】

- ・「授業の負担が大きい」という意見があるが、安易にそうした要望に対応して負担を減らすのではなく、文科省の規定（＝事前・事後で各 2 時間）にもとづいて課題が課されていることを理解してもらう必要がある。
→教務ガイダンスでも伝える。
→父母の集いなどの機会を利用して保護者にも理解してもらう。
- ・「負担が大きい」と感じるのは、「学修」を机に向かって読んだり書いたりすることと狭くとらえているためでもある。現場の体験や人との交流なども「学修」の機会とみなすことができる。
→「学修」とは何かを考え直してもらう。

→ケース・演習などを通じて、外部とのかかわり／地域社会との連携を強める。

・負担を軽減する方法としては以下が考えられる

→課題の提出方法、レポートフォーマット、授業で活用するLMSツールなどを可能な範囲で統一する。

→それぞれの分野でどの時期にどのようなタスクがあるかを把握し、課題を課す時期など可能な範囲で分散するよう配慮する。

(例) 社会福祉：3年後期はほとんど実習で埋まり、水曜以外の授業は取れない。

教 職：3年に介護福祉実習、4年時に教育実習がある。

学 芸 員：4年夏に実習がある。

・「国際感覚が身につく」「語学力が向上する」という項目の満足度が低いことについて、現在すでに英語科目の内容について改善の議論は進められている。プレースメントテストの導入も検討されている。

・「国際感覚」の向上について、留学生との交流機会の増加を図る。この点で日進キャンパスは立地的に不利であるが、交換留学生が受講しやすい授業を提供することで日進キャンパスに出入りする留学生を増やす。

・質問自体に問題がある。たとえば「国際感覚を身につける」こととは、外国語を覚えたり外国人と交流したりすることだけでなく、ジェンダーについての深い知識や多文化共生を目指す態度などを身につけることも指すはずである。アンケートの数値の向上を単に目指すのではなく、このような質問項目に対して、批判的に考察できる力を養うことが重要なのではないか。

→授業での学びが社会生活にどのように生かせるのかをより積極的に伝える必要がある。

総括：両学科から様々な意見が出された。両学科共通して、内容だけでなく、1.アンケートの実施形態、2.実施日程、3.実施場所、4.質問項目が適切であるかについて、ご意見をいただいた。これらのご意見をもとに、次年度の人間関係学部FD活動につなげたい。

【1】活動報告

今年度の文化情報学部FD委員会では前年度まで学長指名のFD委員を務められていた木田先生が任を解かれ委員としては学部からは飯塚一人となった。このため文化情報学科の福永智子教授、メディア情報学科の亀井美保子教授に相談に乗っていただき、これまでベネッセに委託して数年来継続して学生全員に行ってきたコンピテンシーテストを、教員がより理解して学生のテストから現れた特性を理解して一年生と三年生の個別指導に当たることができるようにしたいと思い、下記のとおり学部FD研修会を実施した。

日時：2023年6月27日（火）15:30-17:00

講師：ベネッセiキャリア 田邊衣実子氏

実施方法：Zoom

対象：文化情報学部教員

内容：本学一年生・三年生のコンピテンシーテスト結果からわかる特性を踏まえてそのような傾向の学生にどのようなアドバイスをするとより就職への前向きな動機づけとなるか具体的に説明された。

全学の委員会の日しか学部構成員の講義の無い時間帯がなかったため火曜日の午後に実施したが、各種委員会で参加できなかった先生には亀井先生に動画を視聴できるよう設定していただき、教授会メンバー全員がこのズームによる研修会に参加してアンケートに回答することができた。

この研修会の後に、一年生・三年生共に指導教員によりコンピテンシーテストの各人の結果に基づく個人面談・指導を行ったが、この研修会受講により従来よりコンピテンシーテストを踏まえた質の高い個別指導が可能で成果が上がったと言う声が教授会メンバーから多く行ってよかったと考えている。

【1】活動報告**1. 第1回学部FD研修会**

2023年7月5日（水）、定例教授会開始前に第1回学部FD研修会を古川拓弁護士による講演がZoomを通じて行われました。内容は、以下のとおりです。

日本の労働法に関する最近の講義で、ある弁護士がブラック企業の問題と労働者の権利への影響を取り上げた。ブラック企業とは、長時間労働、残業代未払い、ハラスメントなどの搾取的な慣行を行う企業を指す言葉であり、日本の企業風景の中で急増しているため、従業員の福利厚生や法令遵守に対する懸念が広がっている。同弁護士は、こうした問題に効果的に対処するためには、現行の日本の労働法の下で労働者の権利を理解することが重要であると強調した。

日本の労働法では、労働者は公正な待遇と労働条件の確保を目的とした様々な権利と保護を受ける権利がある。例えば、労働基準法は労働時間の制限を定め、時間外手当の支払いを義務付け、使用者に十分な休憩時間や休日を与えることを義務付けている。また、「雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律」は、性別、年齢、国籍等による差別を禁止し、職場における平等と多様性を促進している。さらに、労働安全衛生法は、労働災害を防止し、労働者の健康を保護するための措置など、安全で健康的な職場環境を維持することを使用者に義務づけている。これらの法律に基づく権利を理解し主張することで、従業員は公正な待遇を確保し、法的基準を遵守する責任を雇用主に負わせることができる。

2. 第2回学部FD研修会

2023年9月12日（火）、定例教授会開始前に第2回学部FD研修会をNTTデータシステム技術株式会社部長の和田芳明氏に生成AI（Chat GPT）の活用についてZoomにて講演いただきました。内容は、以下の通りです。

生成AIが、研究、創造性、効率性の面で新たな可能性を広げることによって、学术界や社会全体にどのような影響を与えるかについて詳述した。学術分野では、生成AIのアルゴリズムは、データ分析、仮説生成、実験設計を自動化することで、科学的発見のペースを加速させる可能性を秘めている。研究者はこれらのツールを活用することで、複雑なデータセットからパターンを発見し、理論モデルをシミュレートし、分野横断的な差し迫った課題に対する新たな解決策を示すことができる。さらに、生成AIは、パーソナライズされた学習体験、適応型個別指導システム、個々の学生のニーズに合わせた対話型シミュレーションを提供することで、教育のアクセシビリティと有効性を高めることができる。これにより、学習者は自分のペースでコース教材に取り組むことができるだけでなく、教育者においても教授法を最適化し、生徒の進歩をより効果的に評価することができる。

学問の領域以外でも、生成AIは社会に広範囲な影響を及ぼし、様々な産業を変革し、文化的な面でも大いに貢献するであろう。創造的な芸術やエンターテインメントの領域では、そのAIのアルゴリズムによって、本物そっくりの画像や楽曲、さらには物語全体を生成し、人間と機械の創造性の境界線を超越することができる。これにより、芸術表現、コンテンツ制作、視聴者エンゲージメントの新たな道が開かれ、ゲーム、映画制作、音楽制作、デジタルメディアにおける革新的な体験がもたらされる。さらに、医療、金融、都市計画などの分野では、ジェネレーティブAIがデータ主導の意思決定を促進し、資源配分を最適化し、サービスの提供を改善することで、最終的に社会の幸福度を高め、経済成長を促進する役割を果たしうる。しかし、生成AIの広範な採用は、プライバシー、偏見、人間の労働力の代替に関する倫理的な検討も提起しており、AIの恩恵が公平に分配され、人間の価値観や利益と一致することを保証するための責任ある開発、規制、倫理的監視などが今後一層重要となることを認識する必要がある。

【1】2023年度に教育学部で独自に実施したFD活動について

教育学部では、学園や大学のFD活動とは別に、以下の2回のFD活動を実施した。これらはすべて教育学研究科FD委員会と共催で実施したものである。

1. コンピテンシー活用のための教員用結果説明会の開催

日時：2023年6月27日（火）12:30～13:20

場所：D409教室

参加者数：22名

講師：株式会社ベネッセキャリア 田邊衣実子 氏

内容：「2023年度GPS-Academic 結果報告（資料配布）」

- ・GPS-Academic（本学ではコンピテンシーテストと呼称）活用による学修成果の可視化について
- ・教育学部1年生の結果について
- ・教育学部3年生の結果について

概要：本学全体で取り組まれている「コンピテンシーテスト」は、個々の学生の学修成果の可視化とそれに基づく個別指導の実施を目的としている。その方針に沿って、教育学部の学生の学修成果の可視化とそれに基づく個別指導を行うにあたり、GPS-Academic（コンピテンシーテスト）の構成、1年生と3年生の結果と個別指導への活用方法について説明を受けた。

GPS-Academicは、問題解決のために必要な「思考力」「姿勢・態度」「経験」を可視化できるアセスメントであり、それらの結果から、個々の学生の適性や成長の様子、学生生活の志向などの可視化が可能となる。大学生生活に慣れ始めた1年生においては、問題解決力を中心とする自己の特徴が理解された上で、大学での生活が将来の展望にどのようなつながるのかなど、今後の学生生活についての指導・助言への活用が可能であろう。また、卒論ゼミの配属が決定したばかりの3年生においては、自己の強みが自覚され、将来設計や就職活動に関して共に考える資料となり得るであろう。

「姿勢・態度」の測定方法と信頼性、データのグラフ化、分析結果と就職結果との相関（他大学データ見本）などについて質疑応答が行われ、理解を深めるとともに、追加資料の提案もいただいた。学生への個別指導のポイント理解と意欲が高められた説明会であった。

2. 「明日の保育・教育を考える」FD講演会の開催

日時：2024年1月27日（土）16:00～17:00

場所：現代マネジメント学部棟206教室

対象：教育学部・教育学研究科教職員および教育学部卒業予定者・在学生・卒業生

目的：教育学部では、毎年、卒業研究発表会のあとに、「明日の保育・教育を考える」をテーマとするFD講演会を行っている。講演者は、各年度末をもって退職される教員に依頼し、「最終講義」という形でお話いただいている。今年度は、今年度末で退職される宮田俊雄教授が、音楽コースの定期演奏会で最終講義に代わる演奏会をなさる予定であるため、本講演会の講演者がいない状況にあった。そのため初等中等教育専修から森和久先生に、保育・初等教育専修から丹羽健太郎先生にお願いし、「明日の保育と教育を考える～卒業生へのメッセージ～」というテーマで開催することにした。スケジュールは以下の通りである。

テーマ：「明日の保育と教育を考える～卒業生へのメッセージ～」

総合司会：山田真紀

16時00分～16時05分 開会の言葉と講師紹介（学部FD委員：石橋）

16時05分～16時25分 森和久先生からのメッセージ「学級崩壊しない学級経営の心得」

16時25分～16時30分 質疑応答

16時30分～16時50分 丹羽健太郎先生からのメッセージ「特別な支援の必要な子どもへの対応」

16時50分～16時55分 質疑応答

16時55分～17時 まとめの言葉（大学院FD委員：山田）

○森和久先生「学級崩壊しない学級経営の心得」の講演要旨

名古屋市の学校では、学級の子どもの状況の把握するために、Q-Uテストを全校で導入しているため、この結果をもとに自分の学級がどのような状態であるのかを把握するののひとつの手段である。学級満足度尺度は、横軸が「不適応感を覚えたり、いじめや冷やかし等を受けたりしていないか」という被害得点を示し、縦軸が「子ども達の存在や行動が教師や友人等から認められているか」という承認得点を示す。このふたつの軸からなる4象限のうち、どこに子ども達の回答が分布するかで、学級の状態をある程度把握することができる。例えば、第1と2の象限に回答が集まっている場合は、「なれ合いクラス」といってよく、若い教員の場合、なれ合いから学級崩壊に至る場合もある。第1と4の象限に回答が集まっている場合は、「管理型の学級」であり、厳しいベテラン教員に多く、反発型の学級崩壊に至る場合もある。

これから教壇に立つ若者が、学級崩壊という憂き目にあわないために、6つのアドバイスをしたい。

①あるべき論にとらわれすぎない：「児童はこうあるべき」という自分の理想に子どもをあてはめようとしたり、「他のクラスはできているのに」という体裁のために子どもを指導したりすると、子どもは「自分たちのための指導ではない」と見抜いて反発する。②子どもに言っていることは自分も守ろう。③個別を見すぎると全体が見えなくなる。学級・学校の全体から個別事例を見るようにしよう。④表現技術を磨こう：何を言っているのかわからない先生はNGであり、指示を出した後、それが終了した後には何をすべきかを、見通しをもって伝えておくことも大切である。⑤新卒の教員が困っていたら、それは本人が悪いわけではなく、新卒を支援できていない組織に問題がある。困ったら人に頼ろう。⑥快適に自分が成長できる範囲を知り、無理をしすぎて体を壊さないように。時には逃げ上手になることも必要である。

○丹羽健太郎先生「特別な支援の必要な子どもへの対応～卒業するみなさんとともに考え続けたいこと～」の講演要旨

発達障害のある幼児りょうくん（仮名）と周囲の定型発達の子どものたちとの3年間の関わり合いの観察から、特別な支援の必要な子どもがいるクラスを運営するために何が必要か、その視点が示された。当初、りょうくんの他児への関わりは、周囲の子どものたちには受け入れ難い不適切なものだった。りょうくんの不適切な行為が継続する中で、「りょうくんは嫌なことをする子」という認識がクラスの中で形成されるのではないかと危惧された。しかし、りょうくんからの関わりを肯定的に受け止め応答する子どもや、発語のないりょうくんの意図を模倣することで理解しようとする子どもがおり、危惧は杞憂となった。その一方で、周囲の子どものたちは保育者の行為を真似ながら「やめて」「ダメ」という意思を躊躇うことなく表明した。りょう君も周囲の子どものたちから学び、両者の間ではいつしか『会話』が成立するようになっていた。子ども達の間には「りょうくんと私たちには同じところがある」という意識が育ち、その背景にはりょうくんが「今すべきこと」をしていなくても「あなたがそこにいること見ているよ。準備ができたら入ってきてね。」というスタンスで見守る保育者の姿勢があった。これらの結果から「相互学習する環境の保障」「行動問題への予防・対応技術」に基づくお互いが育ちあう土壌づくりが大切であるとまとめられた。

これから現場に出ていくみなさんが取り組まれる日々の実践から新しい言葉が見出されるよう、一緒に

考え続けていこうというメッセージが伝えられた。

【2】2023年度教育学部FD活動のふりかえり

- ・昨年度開設された特別支援学校教員免許取得課程（コース）は、新入生や受験生の関心も高く、順調かと思われる。更に、次年度の国語科の中・高教員免許状取得課程（コース）の開設に向けて、教育学部の将来展望を含めた話し合いの場が、関係部署で繰り返し行われた。教育学部が大きな変革期に直面し、変革が現在進行形であることを、共通認識した。
- ・更に、複数の教員の退職が連続し、教員体制が大きく変わる現状に鑑み、情報の共有化と意見交換の場を、これまで以上に数多く設ける必要性が求められている。
- ・その中であって、在学生に今一度しっかりと目を向けることの重要性を再認識させてくれた「コンピテンシー活用のための教員用結果説明会」は、有意義であった。
- ・「学生的心声をいかにFDに活かしていくか」については、本年度も取り組むことができなかった。次年度の引き続きの課題としたい。

【1】委員会メンバー

又吉忍（委員長）、井野恭子（副委員長）、寺西美佐絵、青木ゆかり、井上千秋

【2】2023年度看護学部FD委員会の活動目標

新カリキュラム開始等の背景を踏まえ、教育の質の向上を目指し、相山女学園大学看護学部の教員としての資質向上のための活動（教育、学部運営活動、研究、社会貢献活動の推進に向けたFD委員会の活動）を行う。

【3】活動内容と結果及び課題**1. サロン・ド・相山 開催について**

看護学部一人の教員を招き、教育・研究・社会貢献活動等について話題提供後、教員間の情報交換の場（交流会）とする目的で、自由参加で1回実施した。

第1回 2023年5月9日（火）遠隔実施：早川幸博教授

昨年度に引き続き、サロンを通して教員間の交流などを図れた。今年度は新カリキュラムに向けての活動を優先したため、サロンの開催は1回のみとなった。次年度以降の開催については、次年度の委員会で検討していくこととなった。

2. 看護学部第1回FD研修会の企画、運営、グループワーク内容のまとめ

テーマ：「新カリキュラム構成に向けた意見交換会」

2023年6月13日（火）16：30～（30分程度）：参加者44名

本会のテーマは、「看護学生に対してどのような教育をしていきたいか?」「どのような看護学生を育てたいのか?」について教員同士で気軽に話し合い、理想の教育・理想の学生像などについて抽出した。

実施内容：学部FD委員会と新カリキュラムワーキングとの協働で実施した。前回カリキュラムワーキング活動の反省内容として、ワーキングメンバーとメンバー外教員との情報共有や協働に関する点があげられていたため、今回は新カリキュラムの土台となるDP作成に向けて、全教員での意見交換の会を実施し、DP作成に向けた方向性を確認できたことから意義のある会となった。

＊学部FD委員会と新カリキュラムワーキングとの協働開催。

3. 看護学部第2回FD研修会の企画、運営、グループワーク内容のまとめ

テーマ：「教員と学生の視点の違いを考えようー教員にとって大変なこと、学生にとって大変なことー」

2023年9月1日（金）13：20～14：50 参加者42名

実施目的：6月に開催されたカリキュラムWGと学部FD委員会にて開催された「新カリキュラム構成に向けた意見交換会」を受けて、コロナ禍を経て現在の学生気質が変化してきていることから、学生の背景や価値観等の変化を教員が理解する必要があると、そこで本会は、現在の学生像について理解を深めるとともに、学生と教員の視点の違いを理解し、学修活動に役立てることを目標として実施した。

実施内容：DP・カリキュラム作成にあたり、教員本位だけではなく、学生視点での検討・現在の学生の特徴について全教員で意見交換し、今後の教育の在り方について検討した。研修会では活発な意見交換が行え、今後の教育に対する共有事項をもとに、新カリキュラム構築に向けたDP・カリキュラム作成の検討も実施できた。

*学部FD委員会と新カリキュラムワーキングとの協働開催。

4. 授業・実習アンケートの回収方法についての検討および課題

回収方法については、昨年度と同じ方法（当該科目の最終回に時間を少しとり、教室で入力作業を実施）で実施した。実習アンケートについては、担当員からメール等の連絡を複数回行い、回答率の増加に努めた。

4 大学院FD活動報告

4－1 大学院FD委員会記録

4－2 大学院授業アンケート

(第1回) 2023(令和5)年5月26日(金) 16:55~17:35	1 報告 なし 2 議題 (1) 2023年度大学院FD委員会活動計画に関する件 (2) 2023年度前期大学院授業アンケートに関する件 (3) 相山女学園大学大学院FD委員会規準の一部改正に関する件 (4) その他
(第2回) 2023(令和5)年8月30日(水) メール会議	1 報告 (1) 2023年度前期大学院授業アンケート実施結果について (2) その他 2 議題 なし
(第3回) 2023(令和5)年11月28日(火) ~12月4日(月) メール会議	1 報告 (1) 2023年度大学院FD活動計画検証(中間検証)について (2) その他 ① 2024年度新任教員研修計画について 2 議題 (1) 2023年度後期大学院授業アンケート実施に関する件 (2) 2023年度FD活動報告書に関する件 (3) その他
(第4回) 2024(令和6)年2月22日(木) ~2月29日(木) メール会議	1 報告 (1) 2023年度後期大学院授業アンケート実施結果について (2) その他 ① 「相山女学園大学・大学院FD活動報告書(2023年度版)」原稿の 締切確認について 2 議題 (1) 2023年度大学院FD活動計画検証に関する件 (2) その他

1. 実施概要

・実施期間

前期：2023年 7 月10日（月）～2023年 8 月 3 日（木）

後期：2023年12月21日（木）～2024年 1 月26日（金）

・実施方法：Google フォームにより Web で実施

2. 実施状況

【前期】

研究科	前期在学者数	回答数	回答率
生 活 科 学 研 究 科	8	5	62.5%
人 間 関 係 学 研 究 科	29	22	75.9%
現代マネジメント研究科	7	0	0.0%
教 育 学 研 究 科	4	3	75.0%
計	48	30	62.5%

【後期】

研究科	後期在学者数	回答数	回答率
生活科学研究科	7	3	42.9%
人間関係学研究科	29	22	75.9%
現代マネジメント研究科	6	3	50.0%
教育学研究科	4	2	50.0%
計	46	30	65.2%

5 研究科FD活動報告

- 5－1 生活科学研究科
- 5－2 人間関係学研究科
- 5－3 現代マネジメント研究科
- 5－4 教育学研究科

生活科学研究科FD委員

委員長 加藤昌彦

委員 橋本雅好

藏澄美仁（研究科長）

大口健司（専攻世話人）

【1】実施報告

生活科学研究科は、中部地方初の生活科学系大学院として、衣・食・住に関わる学問の発展に寄与できる人材育成を目標としており、食品栄養科学専攻と生活環境学専攻の2専攻によって構成され、より高度な研究者養成を目指し博士後期課程（人間生活科学専攻）を有している。本研究科のFD委員会は、平成24年に発足されて以来、大学院の授業内容や教育方法を改善し向上させるための活動を続けており、令和5年度は以下の活動を行った。

1. 生活科学研究科新入学生に対するプレFD研修

令和3年度に、①博士課程の学生の中で、特に将来大学教員をめざす可能性のある学生を対象に、「学士課程の授業を担う機会を与えることで、ティーチングに関わる技能を高め、将来の大学教員として指導的役割を果たす人材の育成につとめる。」こと、②昨年度作成した「大学院博士課程プレFD・大学教員プログラム—大学で教えるために—」資料をもとに、大学院生対象のガイダンスで、TAとしての心がまえを、研究科長からレクチャーすることを決めた。

今年度は、博士課程の新入生がいなかったため、博士課程の学生に対するガイダンスは実施せず、2023年4月4日に修士課程の院生に対して、研究科長が、学生を教育指導する観点と研究を指導する観点から説明を実施し、各院生から受講証明書を提出させた。

2. 研究成果発表会の実施

修士課程の両専攻および博士後期課程における中間発表会、修士論文発表会を開催した。個別の指導教員のみならず、他の教員からも様々な意見や助言を受けることにより、大学院生の研究活動がさらに向上すると考えられ有益な会となった。

また、同時に9月修了生による修論発表が行われたが、その内容は修士の学位に値するものとの評価であった。

（1）大学院修士中間発表会 2023年9月4日（月）

（食品栄養学専攻）

- ・上田彩笑子「大学男子サッカー選手の筋肉量および運動神経活動の特性と食事内容との関連」

（生活環境学専攻）

- ・砂田ひかる「自閉スペクトラム症の人たちの感覚・行動特性からみた空間記述の類型化と空間的アイディア図鑑の制作」
- ・藤真結子「国産木材の製材歩留まり向上に向けた木造住宅設計条件の提示」

（2）大学院修士論文発表会 2023年9月4日（月）

（生活環境学専攻）

- ・宮原美佳「西山商店街における空き店舗活用の設計提案，—名古屋市の商店街活性化事業「ナゴヤ商

店街オープン」における事例分析を通して－」（9月修了生）

（3）大学院博士中間発表会 2023年9月4日（月）

- ・高橋里佳「地球環境と持続可能性に配慮した集合住宅団地再生手法に関する研究」

（4）大学院博士事前審査会の実施

①2023年9月11日（月）

課程博士において就業年数を超えた場合には、博士の学位申請者が、自らの研究内容を事前に発表し、多くの先生方から意見をいただいている。このことにより、論文内容をより深いものとすると同時に、博士に値するかどうかの評価をいただくことができ、大変、有意義な発表会となった。

- ・加藤舞子「若年女性における、遺伝要因と食事・身体状況に関する研究」
- ・渡辺恵里花「空腹時値から食後脂肪代謝の予測可能性と脂肪摂取試験を用いた食後脂質代謝評価をするための新たな指標の提案」

②2023年11月14日（火）

- ・加藤千穂「若年女性の日常行動が姿勢に及ぼす影響」

③2023年12月12日（火）

- ・今井素恵「衣生活環境における衣服の保温性と衣服下微小空隙の熱伝導に関する研究」

（5）大学院博士課程公聴会

①2024年1月30日（火）

- ・渡辺恵里花「空腹時値から食後脂肪代謝の予測可能性と脂肪摂取試験を用いた食後脂質代謝評価をするための新たな指標の提案」
- ・加藤舞子「若年女性における、遺伝要因と食事・身体状況に関する研究」

上記のように公聴会を開催し、続く博士後期部会において、両者の博士の学位授与が妥当であると結論に至った。

②2024年2月19日（月）

- ・加藤千穂「若年女性の日常行動が姿勢に及ぼす影響」
- ・今井素恵「衣生活環境における衣服の保温性と衣服下微小空隙の熱伝導に関する研究」

上記のように公聴会を開催し、続く博士後期部会において、両者の博士の学位授与が妥当であると結論に至った。

（6）大学院修士論文発表会

2024年2月20日（火）

（食品栄養学専攻）

- ・上田彩笑子「大学男子サッカー選手の筋肉量および運動神経活動の特性と食事内容との関連」

（生活環境学専攻）

- ・砂田ひかる「自閉スペクトラム症の人たちの感覚・行動特性からみた空間記述の類型化と空間的アイディア図鑑の制作」
- ・藤真結子「国産木材の製材歩留まり向上に向けた木造住宅設計条件の提示」

上記内容の修士論文の審査及び最終試験を行い、続く研究科委員会において修士の学位授与が妥当であるとの結論に至った。

3. 授業アンケートの実施

本年度も生活科学研究科に在籍する大学院生を対象に、前期・後期の2回授業アンケートを実施した。方法は、Google フォームでwebにより実施した。アンケート回収率を、次の表に示す。

	2023 前期	2022 前期	2023 後期	2022 後期
人間生活科学専攻（博士後期課程）	0% (0/1)	33% (1/3)	0% (0/1)	100% (1/1)
食品栄養科学専攻（修士課程）	100% (2/2)	50% (2/4)	100% (2/2)	75% (3/4)
生活環境学専攻（修士課程）	60% (3/5)	50% (2/4)	25% (1/4)	25% (1/4)
合計	60% (5/8)	45% (5/11)	43% (3/7)	56% (5/9)

なお、アンケートの設問内容は、前期・後期とも同じ以下のとおりである。

※設問 1-1) ～ 1-3) は選択肢形式、設問 2-1) ～ 2-4) は記述形式

- 1-1) 所属専攻の科目構成は適切か
- 1-2) 所属専攻の時間割は適切か
- 1-3) 研究指導は適切に行われているか
- 2-1) 大学院の授業科目及び研究指導科目で興味深かった点、有益であった点など
- 2-2) 大学院の授業科目及び研究指導科目の改善すべき点
- 2-3) その他研究指導に関する点で、有益だった点、改善すべき点
- 2-4) 授業環境について、意見・要望
- 2-5) その他、気づいた点を自由記述

これらの得られたアンケート結果について、確認と検証を行った。

回収率の向上は全学の課題であり、昨年度から回収率の向上を目指して、学生が回答しやすい選択肢による設問となっている。

生活科学研究科の回収状況についてみると、2023年度は、前期は60%と比較的高値、後期は43%と回答率が減少していたが概ね5割程度の回収率で、2022年度とほぼ同等であった。後期に関しては、修論発表会の準備等の影響があったものと思われるが、学生が回答しやすい選択肢による設問に変更されたことにより、アンケートに費やす時間は大きく無いことから、積極的に授業アンケートへの回答を呼びかけることで、回答率は上げられると考える。

次に、アンケートの回答内容について検証した。前期の選択肢形式の設問では、1-1)、1-2)、1-3) の全てにおいて、「そのとおり」「どちらかといえばそのとおり」と肯定的な回答であった。また、記述形式の設問においても「大変勉強になった」「少人数で、質問がしやすかった」といった意見であった。

後期の選択肢形式の設問では、「2) 時間割は適切か」について、「どちらかといえばそうではない」の回答が1名みられた（食品栄養科学専攻）が、その他項目は全員が肯定的な回答だった。内容については、今後の検討が必要であるが、来年度からは、特論に関して全科目を毎年開講することに改善させており、来年度の意見を参考にしたい。記述形式の設問では授業科目に関わる設問項目（前期1)・2)、後期2-1)・2-2)) について、おおむね良好な回答を得られた。授業環境面（2-3)) については、学食の閉まる時間が早いとの意見がみられており、全学的な改善が必要である。

現在、在学学生数が極めて少ない状態でのアンケートであることを考慮しつつ、今後も大学院生の学修や研究が円滑に遂行できるよう、研究科内で積極的な学生からあるいは教員からの提案を集約し、より良い研究科へと改善を図っていきたい。

【1】実施報告

2023年度の人間関係学研究科のFD活動について下記のように報告する。

1. 臨床心理学領域**(1) 研究教育活動****①心理学実験・心理学特殊実験のTA（前後期）**

学部2年生を対象とした心理学実験（前期）、心理学特殊実験（後期）のTAとして、大学院生13名（M1）が1年間（うち4名は半期間）にわたり実験実習をサポートし、心理学研究法の実践的サポート、統計解析、レポート作成の相談にあたった。

②自主課題発表会（2024年1月11日）

心理学特殊実験の成果を発表する自主課題発表会において、大学院生（M1）9名が会場の司会（座長）として運営に携わった。

③修士論文中間発表会（2024年3月1日）

2024年10月に修士論文を提出する予定である大学院生（M1）14名が、2024年3月1日に発表を行った。これは毎年実施し、複数の教員とM1が参加した。発表者である大学院生は指導教員による指導を超えて、他の教員からさまざまな助言指導を得ることにより、より広い観点から研究にアプローチする力が涵養される。

④臨床心理相談室紀要『相山臨床心理研究』の発行

教員4名が研究論文を執筆し、非常勤相談員1名、大学院生（M2）8名が事例研究を執筆した（2024年3月8日発行）。大学院生の事例研究については、原則として外部の臨床心理士や精神科医からコメントをいただき、事例の理解や自身の臨床実践上の課題などを振り返ることにより、その後の臨床実践や研究に示唆を得る好機となっている。

⑤オープンキャンパス

院生10名が分担して、3回の学科展示企画の紹介と、心理検査体験の補佐を行った。

⑥相山女学園中学校「こころの授業」の参加（2024年2月19日）

相山女学園中学校の道徳の時間において、教員5名と大学院生（M1）5名が「こころの授業」を行った。大学院生はロールプレイのデモンストレーションや、生徒が実施するワークのファシリテーションを行い、心理臨床実践を体験的に学ぶ場となった。

(2) 臨床実践**①面接の個別指導**

臨床心理士資格試験の一次試験に合格した全員に対して、教員が分担して面接に対する個別指導を行った。

②公認心理師試験・臨床心理士資格試験対策講座

2023年11月25日から2024年1月18日まで計8回、公認心理師試験・臨床心理士資格試験対策講座を外部講師と契約して開催した。参加者はM1が8名、M2が9名の合計17名であった。

③WISC-5及びWAIS-IV（知能検査）研修会

WISC-IVから改訂されたWISC-5及び、WAIS-IIIから改訂されたWAIS-IVについての研修会を2024年3月11日に実施した。参加者はM2が6名、M1が11名の計17名であった。

④臨床心理相談室ケース報告書の提出（2024年 3 月～4 月）

臨床心理相談室では全相談員・実習員（教員・非常勤相談員・ケースを担当している大学院修了生・大学院生）が個別に臨床実践を振り返り、主訴の改善や進捗を検討し、記録をきちんと保存することができたかについて振り返る機会として、年 1 回のケース報告書の提出を行った。大学院生・修了生には、心理専門職における職能として重要な位置を占める自身の臨床実践・ケースの主訴の改善度などを確認し、次年度以降の目的を明確化する機会となった。

⑤日進市教育委員会との連携事業

- ・発達障害保護者相談会：日進市内の小中学生の保護者を対象として子どもの発達障害に関する相談会を開催した（2023年 9 月 8・14・15日の 3 日間）。教員 9 名と相談員 1 名が34件の保護者からの相談を受けた。
- ・小中学校への巡回指導：教員が市内の13小中学校に、前後期を通じ原則として 2 回出向いて巡回指導を行った（2023年 6 月～2024年 3 月）。

⑥相談室主催特別講演会（2023年11月11日）

外部講師を招いて、臨床心理相談室主催の特別講演会を開催した。講演会には、相談室員だけでなく、地域の方をはじめ、教育、福祉、医療など様々な領域から、多くの方にご参加いただいた。講師による、こどもの心理支援に関する講演は大変好評であり、日々の臨床活動を見直す好機となった。また、本学相談室の活動を、地域の方々に広く知ってもらう機会となった。

⑦公認心理師実習演習担当教員講習会への参加（2023年11月25-26日、2024年 1 月 6 -7 日、19-21日）

今年度から開催されることが決定された、公認心理師実習演習担当教員講習会に 2 名の教員が各 5 日ずつ参加した。2 日間の実習指導者養成講習会との共通科目、3 日間の実習演習担当教員のための各論などがあり、公認心理師養成において重要な視点、学生支援の方法、実習機関との連携において重要なポイントなど、他機関の実習指導者や他大学教員とのワークを用いた実践的な研修により、本学における今後の課題を検討する機会となった。

2. 人間共生領域

当初では2023年11月中に行う予定であった修士論文中間報告会は、研究倫理審査委員会の承認を得てからの実施へと変更したため、2024年 4 月13日に行うこととなった。新M2 の大学院生が春季休暇中に実施したインタビュー調査とその分析をもとにした修論の中間報告を行い、長期履修の社会人院生（新M2）と人間共生領域の教員らで発表内容について検討を行う。

またFD活動の一環として、2023年 6 月に人間共生領域の教員らで、教員の資質向上の取り組みに関する意見交換会を行った。ある教員は、現代マネジメント研究科が今年度からスタートさせた「履修証明プログラム」で 1 コマ授業を担当し、社会人履修生らとの活発な意見のやり取りから学問上の刺激を受け、別の教員は、相山人間学研究センターでの第 1 回人間講座を担当し、自身の研究成果を積極的に社会に発信していた。他にも、自治体主催の講座で講師を務めるなど、地域住民とのまちづくり実践に取り組む教員やフリースクール・社会福祉施設の現場に足繁く通い続ける教員、あるいは積極的に海外でのフィールドワークを行っている教員もいるなど、いずれも現場で働く職業人や一般市民、あるいは社会のさまざまな現場と積極的に関わり続けることで、個々人が教員としての資質向上に絶え間なく取り組んでいることが確認できた。

これらは領域による組織的な教員の資質向上の取り組みとは言えないものの、今後もこういった意見交換の場を定期的にもつことで、お互いの経験や知見を共有し、教員間同士の研究活動の連携へと繋げていくことにしたい。なお、先に記した相山人間学研究センターは2023年10月に学園から大学へと業務移管され、「人間学・ジェンダー研究センター」へと改まったが、センターが主催するプロジェクト研究やフォーラム、人間講座に人間共生領域として積極的に関与していく予定である。そのことで個人レベルに留まらない組織的な教員の資質向上の取り組みへと転換を図っていく所存である。

3. 教育学領域

在籍者が1名いるが、今年度で除籍予定の過年度生でもあるため、該当するFD活動は行っていない。

【2】2023年度大学院授業アンケート結果について

前期・後期それぞれに実施された大学院授業アンケート結果の確認・検証について、本研究科ではカリキュラム体系の異なる3つの領域ごとにおこなっている。2023年度は、3領域(臨床心理学領域・人間共生領域・教育学領域)に在籍者がいることから、領域ごとの確認・検証結果を報告し、最後に研究科の視点で総括する。

[臨床心理学領域]

まずは良好な評価が得られた科目であるが、前期開講科目では「心理療法特講Ⅰ(心理支援に関する理論と実践)」「心理学研究法特講」「臨床心理学特講Ⅰ」「臨床心理査定演習Ⅰ・Ⅱ」「障害者心理学特講(福祉分野に関する理論と支援の展開)」「産業組織心理学特講(産業・労働分野に関する理論と支援の展開)」であった。中でも「臨床心理査定演習Ⅱ」に対して高く評価する記述が多かった。また、「臨床心理学基礎実習Ⅰ」「心理実践実習ⅡC」はケースカンファレンスであるが、自分自身のケース発表や他者のケース検討を通して多くの気づきが得られたとの評価も多かった。後期開講科目については「比較行動学特論」「学校臨床心理学特講(教育分野に関する理論と支援の展開)」「臨床心理査定特講(心理的アセスメントに関する理論と実践)」「心の健康教育に関する理論と実践」「人間関係論Ⅰ」が挙げられた。「臨床心理学基礎実習Ⅱ」「心理実践実習ⅢC」はケースカンファレンスであるが、これらについても良好な評価が得られた。

前期・後期ともに、特別研究については、丁寧な指導への評価があった。

次に、改善の要望があった科目であるが、前期開講科目では、「臨床心理学特講Ⅱ」に対し基礎的事項についての丁寧な指導に対する要望があった。改善策として、開講時期が前期であることを踏まえて、基本を十分の踏まえたうえで具体的に実践例を取り上げる対策が検討された。また、「家族・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践」に対して、配布資料、参考文献の更なる提示に関する要望があり、今後はそれらを充実させる対策が検討された。後期科目では、「学校臨床心理学特講(教育分野に関する理論と支援の展開)」に対して、開講時期と学外実習の時期の兼ね合いに関しての要望があった。学外実習は実習先との調整や定員などもあり、要望に応えることが難しい場合もあるが、今後可能な範囲で配慮することとなった。また、特別研究Ⅲに関しては、修士論文提出期限が近づいた際の指導についての要望であり、提出期限を踏まえての適切なタイミングでのフィードバックや、直前での大きな変更指示はしないなどの対策が検討された。

[人間共生領域]

前期については授業アンケートへの回答がなかったが、後期については在籍者2名から回答を得た。記述式の回答はなかったが、本領域の院生は一般1名、社会人1名という構成であり、記述内容によっては匿名性が守られないため、その点でも致し方ないと言える。

「科目構成の適切さ」と「研究指導の適切さ」については、「そのとおりである」と「どちらかといえばそのとおりである」が、それぞれ一つずつであったが、「時間割の適切さ」については、二つとも「どちらかといえばそのとおりである」であった。本領域は、社会人にも門戸を開いているため、前後期ともに必修の科目を土曜日の2限に開講しているが、一般の院生にとっては負担かもしれない、また2限の前後に授業もないため、このような評価に繋がったのかもしれない。また、平日の6限の時間帯に星が丘キャンパスのサテライト教室で授業を開講しているが、特定の曜日に授業科目が集中している点も、評価を下げる要因となったと推察される。

そのため、土曜日の必修科目については、1・2限連続による隔週開講を取り入れるなどして、受講者の通学の負担を軽減するとともに、平日の6限の授業についても、なるべく授業科目が重ならないよう教員間で調整を図るとともに、「メディア授業」および「メディア授業科目」を積極的に取り入れていくことで、

社会人院生が働きながらより効率的に学べるよう改善していきたい。

[教育学領域]

在籍者が1名いるが、過年度生であり、前後期ともにアンケートへの回答はなかった。

[総括]

臨床心理学領域では、実質的な授業改善効果を得るために、授業アンケート結果について話しあうだけでなく、改善の要望があった科目の担当者は具体的な改善の工夫を書いて領域代表に提出することとし、経年変化をフォローする検証システムを2022年度から開始した。2023年度では、2022年度に改善要望のあった科目担当者への要望は出ておらず、一定の効果があると言える。また、2023年度後期からは、各種改善要望に対し、院生へのフィードバックの実施も行い、アンケートに関しての双方向性も担保する取り組みも開始した。

【1】活動報告

① 実施時期：2023年7月中旬～下旬

活動内容：当研究科において、全学実施の授業アンケート調査を実施した。学生数が少ないことから、アンケート以外に主指導教員が各科目の難易度や授業の早さなどについてきめ細かくヒアリングを行って理解度や満足度を更に向上させることになった。

② 2023年8月2日13時30分～15時：第1回修論構想合同発表会（1年生）

4月までに提出していた研究計画をより具体化し、研究手法や研究対象をより精緻化した内容にして発表会を実施した。普段、指導を受けている教員以外からも多様な意見や親身なアドバイスが寄せられ、学生たちの研究意欲が増進するとともに、文献調査や収集の効率化についてのソフトウェアの活用方法など、教員の持つ様々なスキルが可視化された。

③ 同上15時30分～18時30分：修論中間合同発表会（2年生）

事例や分析のために欠けているデータについて、どのように収集すればよいかについての具体的なアドバイスや、論理の立て方についてより良い方法などについてのアドバイスや議論が展開された。

④ 2023年12月5日17時30分～18時30分：第2回修論構想発表会（1年生）

8月に実施した第1回発表会で得られた知見をもとに研鑽を積み、学術論文に資する内容の骨子を発表できるようになっていた。

⑤ 2023年12月12日17時30分～18時30分：修論最終発表会（2年生）

最終段階の論文について発表し、より考察を深めて質の高い論文にするためのアドバイスや具体的な方法などの活発な議論が交わされた。

⑥ 実施時期：2024年1月中旬～下旬

活動内容：当研究科において、全学実施の授業アンケート調査を実施した。もともと対象人数が少なく、具体的な記載内容も限られていたことから、指導教員が具体的な改善内容を聞き取るなどして授業改善のための情報の補足収集を行った。

【1】2023年度教育学研究科独自FD活動報告

教育学研究科では、学園や大学のFD活動とは別に、以下のFD活動を実施した。これは学部FD委員会と共催で実施したものである。

1. 「明日の保育・教育を考える」講演会

日時：2024年1月27日（土）16時～17時

場所：現代マネジメント学部棟206教室

対象：教育学部・教育学研究科教職員および教育学部卒業予定者・在学生・卒業生

目的：教育学部では、毎年、卒業研究発表会のあと、「明日の保育・教育を考える」をテーマとするFD講演会を行っている。例年は、年度末をもってご退職される先生方に最終講義をお願いしているが、今年度の定年退職者は宮田俊雄先生であり、音楽コースの定期演奏会で最終講義に代わる演奏会をなさる予定であるため、本講演会の講演者がいない状況にあった。そのため初等中等教育専修から森和久先生に、保育・初等教育専修から丹羽健太郎先生にお願いし、「明日の保育と教育を考える～卒業生へのメッセージ～」というテーマで開催することにした。スケジュールは以下の通りである。

総合司会：山田真紀

16時00分～16時05分 開会の言葉と講師紹介（石橋先生）

16時05分～16時25分 森和久先生からのメッセージ
「学級崩壊しない学級経営の心得」

16時25分～16時30分 質疑応答

16時30分～16時50分 丹羽健太郎先生からのメッセージ
「特別な支援の必要な子どもへの対応」

16時50分～16時55分 質疑応答

16時55分～17時 まとめの言葉（石橋先生&山田）

（1）森和久先生「学級崩壊しない学級経営の心得」ご講演の要旨

名古屋市の学校では、学級の子どもの状況を把握するために、Q-Uテストを全校で導入しているため、この結果をもとに自分の学級がどのような状態であるのかを把握するのもひとつの手段である。学級満足度尺度は、横軸が「不適応感を覚えたり、いじめや冷やかし等を受けたりしていないか」という被侵害得点を示し、縦軸が「子ども達の存在や行動が教師や友人等から認められているか」という承認得点を示す。このふたつの軸からなる4象限のうち、どこに子ども達の回答が分布するかで、学級の状態をある程度把握することができる。例えば、第1と2の象限に回答が集まっている場合は、「なれ合いクラス」といってよく、若い教員の場合、なれ合いから学級崩壊に至る場合もある。第1と4の象限に回答が集まっている場合は、「管理型の学級」であり、厳しいベテラン教員に多く、反発型の学級崩壊に至る場合もある。

これから教壇に立つ若者が、学級崩壊という憂き目にあわないために、6つのアドバイスをしたい。
①あるべき論にとらわれすぎない：「児童はこうあるべき」という自分の理想に子どもをあてはめようとしたり、「他のクラスはできているのに」という体裁のために子どもを指導したりすると、子どもは「自分たちのための指導ではない」と見抜いて反発する。②子どもに言っていることは自分も守ろう。③個別

を見すぎると全体が見えなくなる。学級・学校の全体から個別事例を見るようにしよう。④表現技術を磨こう：何を言っているのかわからない先生はNGであり、指示を出した後、それが終了した後には何をすべきかを、見通しをもって伝えておくことも大切である。⑤新卒の教員が困っていたら、それは本人が悪いわけではなく、新卒を支援できていない組織に問題がある。困ったら人に頼ろう。⑥快適に自分が成長できる範囲を知り、無理をしすぎて体を壊さないように。時には逃げ上手になることも必要である。

（２）丹羽健太郎先生「特別な支援の必要な子どもへの対応～卒業するみなさんとともに考え続けたいこと～」

ご講演の要旨

発達障害のある幼児りょうくん（仮名）と周囲の定型発達の子どもたちとの３年間の関わり合いの観察から、特別な支援の必要な子どもがいるクラスを運営するために何が必要か、その視点が示された。当初、りょうくんの他児への関わりは、周囲の子どもたちには受け入れ難い不適切なものだった。りょうくんの不適切な行為が継続する中で、「りょうくんは嫌なことをする子」という認識がクラスの中で形成されるのではないかと危惧された。しかし、りょうくんからの関わりを肯定的に受け止め応答する子どもや、発語のないりょうくんの意図を模倣することで理解しようとする子どもがおり、危惧は杞憂となった。その一方で、周囲の子どもたちは保育者の行為を真似ながら「やめて」「ダメ」という意思を躊躇うことなく表明した。りょう君も周囲の子どもたちから学び、両者の間ではいつしか『会話』が成立するようになっていた。子ども達の間には「りょうくんと私たちには同じところがある」という意識が育ち、その背景にはりょうくんが「今すべきこと」をしていなくても「あなたがそこにいること見ているよ。準備ができたら入ってきてね。」というスタンスで見守る保育者の姿勢があった。これらの結果から「相互学習する環境の保障」「行動問題への予防・対応技術」に基づくお互いが育ちあう土壌づくりが大切であるとまとめられた。

これから現場に出ていくみなさんが取り組まれる日々の実践から新しい言葉が見出されるよう一緒に考え続けていこうというメッセージが伝えられた。

【２】授業アンケートのふりかえり

（１）前期の授業アンケートの振り返り

前期の授業アンケートには、４人の院生のうち３名が回答してくれた。３名ともに「研究指導は適切に行われている」に「そのとおりである」と答え、満足度は高い。大学院の授業科目及び研究指導科目で「興味深かった点、有益であった点」については、Aさんは「家庭科教育内容研究」と「教職インターンシップ」を挙げ、前者については「授業計画の内容を踏まえた上で、私の研究のテーマと絡めて家庭科の授業方法や学習内容の検討・分析をする時間を作ってくださったので、家庭科教育だけではなく、自分の研究についても視野が広がりました」と述べ、後者については「研究授業の時間や、事前準備や事後の振り返りの時間を設けていただけたので、実践的な学びになりました」と述べていた。また「その他研究指導に関する点で、有益だった点」について「研究についての指導の時間も週に何度か作っていただき、また、教授のワークショップなど現場に伺う時間を作っていただけて勉強になりました」と述べていた。Bさんは、「特別支援教育学特論」を挙げ、「実践経験が豊富な松村先生のご指導は大変有意義でした。一对一の授業になりがちな大学院講義ですが、今回は３人で受講したので皆で意見し考えながら進める温かい授業になりました。今後の保育・教育現場において必要な学びが豊富でしたので、今後は必須科目になっても良いと思います」と述べ、「その他」については、「中間発表では、多くの先生方からご意見いただき、自身の研究方法や方針を改めて考えるきっかけになりました」「大学院生室の設備（コピー機）不良の際、すぐに対応いただけて助かりました」と述べていた。Cさんは「臨床発達心理学特論」を挙げ、「自身の過去の支援例から支援対象児に対し、どのようなアタッチメントをしなければならなかったのかよく分かった。それに伴い、対象児やその母親についてより理解を深めることができた」と述べ、「その他」については、「研究の一環で、ボランティアをさせていただく際、担当教授が教務課や学生課に掛け合ってくださったこと」

に感謝の意を示していた。「改善すべきこと」については記述がなかった。自由記述の内容から、与えられた環境のなかで誠実に精一杯学ぼうとする学生の姿勢が伝わってきた。

(2) 後期の授業アンケートの振り返り

後期の授業アンケートには、4人の院生のうち2名が回答してくれた。ふたりの満足度は高く、大学院の授業科目及び研究指導科目で「興味深かった点、有益であった点」について、ひとり「教職インターンシップ」をあげ、もうひとり「特別研究」をあげていた。教職インターンシップでは、附属校の先生方のご協力により、多くの授業実践を積むことができ、実践力を身に付けられたことが満足の源になったこと、「特別研究」については、修士論文の執筆において丁寧な指導を受けられたことに、感謝の意が述べられていた。一方で、改善点として、修士論文中間発表会について、2年生は発表時間を5分長くしてほしいという要望が寄せられた。1年次の発表では20分でも十分であるが、2年次では研究が進展により、伝えたい内容・助言をいただきたい箇所が増えるため、もう少し時間のゆとりをもって指導を受けたいという要望であった。この指摘を踏まえて、今後の中間発表会の進め方を再考していきたい。

6 FD委員会名簿

2023年度全学FD委員会委員

所 属	職位	氏名	選出区分
学長補佐	教授	長澤 唯史	学長補佐
生活科学部	教授	加藤 昌彦	学部FD委員
国際コミュニケーション学部	教授	影山 穂波	学部FD委員
人間関係学部	准教授	舩田 亮太	学部FD委員
文化情報学部	教授	飯塚 恵理人	学部FD委員
現代マネジメント学部	准教授	Quasha Steven	学部FD委員
教育学部	教授	石橋 尚子	学部FD委員
看護学部	准教授	又吉 忍	学部FD委員

2023年度大学院FD委員会委員

所 属	職位	氏名	選出区分
学長補佐	教授	長澤 唯史	学長補佐
生活科学研究科	教授	加藤 昌彦	研究科FD委員
人間関係学研究科	教授	鈴木 亮子	研究科FD委員
現代マネジメント研究科	准教授	石井 圭介	研究科FD委員
教育学研究科	教授	山田 真紀	研究科FD委員

相山女学園大学・大学院FD活動報告書（2023年度）

相山女学園大学・大学院ファカルティ・ディベロップメント
第11号（通巻 第24号）

2024（令和 6）年 6 月発行

編 集 相山女学園大学全学FD委員会・大学院FD委員会

発 行 相山女学園大学

〒464-8662 名古屋市千種区星が丘元町17-3

TEL 〈052〉781-1186（代）

椋山女学園大学・大学院 F D活動報告書（2023年度）正誤表

修正後

(P. 4)

2. 実施科目数及び実施率

学部	対象科目数	実施科目数	実施率	未実施科目数
教養教育科目	184	143	77.7%	41
生活科学部	105	97	92.4%	8
国際コミュニケーション学部	144	102	70.8%	42
人間関係学部	77	67	87.0%	10
文化情報学部	91	65	71.4%	26
現代マネジメント学部	59	40	67.8%	19
教育学部	109	101	92.7%	8
看護学部	42	35	83.3%	7
教職共通	12	12	100.0%	0
計	823	662	80.4%	161

※「未実施科目数」＝回答率が0.0%の科目

※参考：2022年度前期授業アンケート実施率（Webで実施） 82.7%（712/861科目）

※授業がアンケート実施前に終了する科目、担当者が交代した科目等は対象科目から外した。

※2023年度から、教養教育科目は、開講学部によらず、すべて「教養教育科目」区分で集計。

修正前

(P. 4)

2. 実施科目数及び実施率

学部	対象科目数	実施科目数	実施率	未実施科目数
教養教育科目	184	143	77.7%	41
生活科学部	105	97	92.4%	8
国際コミュニケーション学部	144	102	70.8%	42
人間関係学部	77	67	87.0%	10
文化情報学部	91	65	71.4%	26
現代マネジメント学部	59	40	67.8%	19
教育学部	109	101	91.2%	8
看護学部	42	35	83.3%	7
教職共通	12	12	100.0%	0
計	823	662	80.4%	161

※「未実施科目数」＝回答率が0.0%の科目

※参考：2022年度前期授業アンケート実施率（Webで実施） 82.7%（712/861科目）

※授業がアンケート実施前に終了する科目、担当者が交代した科目等は対象科目から外した。

(P. 5)

2. 実施科目数及び実施率

表（略）

※「未実施科目数」＝回答率が0.0%の科目

※参考：2022年度後期授業アンケート実施率（Webで実施） 79.2%（639/807科目）

※授業がアンケート実施前に終了する科目、担当者が交代した科目等は、対象科目から外した。

※2023年度から、教養教育科目は、開講学部によらず、すべて「教養教育科目」区分で集計。

(P. 5)

2. 実施科目数及び実施率

表（略）

※「未実施科目数」＝回答率が0.0%の科目

※参考：2022年度後期授業アンケート実施率（Webで実施） 79.2%（639/808科目）

※授業がアンケート実施前に終了する科目、担当者が交代した科目等は、対象科目から外した。

(P. 7)

2023年度（前期）授業アンケート結果

1. ～3. （略）

4. 実施科目数

表（略）

※2023年度から、教養教育科目は、開講学部によらず、すべて「教養教育科目」区分で集計。
2022年度前期数値も、2023年度区分に合わせて再集計。

(P. 7)

2023年度（前期）授業アンケート結果

1. ～3. （略）

4. 実施科目数

表（略）

修正後	修正前
(P. 10) 2023 年度（後期）授業アンケート結果 1. ～3. （略） 4. 実施科目数 表 （略） ※2023 年度から、教養教育科目は、開講学部によらず、すべて「教養教育科目」区分で集計。 2022 年度後期数値も、2023 年度区分に合わせて再集計。	(P. 10) 2023 年度（後期）授業アンケート結果 1. ～3. （略） 4. 実施科目数 表 （略）